

1.ps1

(
空
自)
2

3.psd

4.psd

5.psd

Track 6 Eskimo

「あー……寒い、寒い」

思わず零してしまつた言葉は、白い息となつて眼前に現れる。

冬——真冬の季節だ。

俺は寒いのが苦手だ。寒いよりは暑い方がマシだと思つてゐる。そもそも寒い方が好きな人間なんて、この国にはあまりいなないのだろうとさえ思つてゐるほどだ。

手持ちの厚手の服は少なく、重ね着をしてその上にコートを着る。これが俺の冬のファッショニスタイルである。見た目もそこまで悪くないはずだ。これでも多少は服に気を使つてゐる方である。世間の目はもちろん、リニアや葵にからかわれない程度には。

『鈴木も年相応の格好にしたらどうだ?』

ふと、頭に葵の声が響く。昨年の苦い思い出だ。あれ以来、俺はファッショニに関心を持た

ざるを得なくなつたわけだが……。

先日の事件から一ヶ月が過ぎ、大学の方も冬休みに入つた。俺の生活も随分『普通』というものに戻つており、アルバイトも再開し、時間が空くと今日のように図書館で勉強をする日々。

「これが日常か、あるいはあれが日常か」

以前に比べるとあのような非常識な事態に巻き込まれてゐる頻度は少ない方だ。

それでもやはりー、

「おつ、鈴木じやないか！」

突然、背後からの呼び掛けに俺の意識は現実へと引き戻される。

「先輩…… !!」

「元気だつたか？」

「あ、はい。まあまあ元気にやつてます」

「随分久しぶりだな」

そう言つて笑う彼は俺の大学の先輩だ。ゼミや講義でよく一緒にになり仲良くなつた、自分で言うのも何だが、大学内の数少ない知り合いで。

「あれか、図書館からの帰りか?」

「はい。そう言えば先輩、試験の結果どうでした?」

「お前……会つて早々その話題か」

見るからに彼の表情は暗くなつていく。それを見た俺は一瞬で察してしまつた。

「ま、まあ復学したばかりなんですから、ちょっととずつ頑張つてください」

「そうだな、俺もそろそろちやんとするか」

「そろそろじゃ遅いと思うのですが」

「うつせー、先輩に向かつてなんだその口の聞き方は——って、そういうえばお前は試験どうだ

つたんだよ」

先輩は俺の肩に手をかけたまま、思い出したかのように問いかけた。

「何単位とれた？」

「俺ですか？まあ目標にしていた分は取れましたけど」

「二のくらいか？」

そう言つて先輩はハンドサインを示す。おそらく十単位で示しているのだろう。俺は小さく首を振つて、先輩以上の数を示した。

「何だ、お前!! 普通に単位取れてるじやんか勉強したのか?!?」

「当たり前じゃないですか」

思わず後ろに身を引いた彼を、ため息と共に俺は振り返る。そして、たった今自分が出てきた場所と先輩を見比べた。

「そりいえば先輩も図書館に来ていたんですか？意外ですね」

「ん？ああ、まあ資格の勉強に。取つといて損はないと思つて」

「実務系ですか？」

「語学はいらぬからな」

「さすが……留学した人は違いますね」

「俺もあの時は必死だつたけどな、今はこの有様だが」

先輩は軽く肩をすくめてため息をつく。しかし、その演技がかつた困り顔からして、そこまで深刻に悩んではいなさそうだ。

「あ、先輩。それじやあ俺はそろそろ帰るんで」

「まだ夕方じやないか、早いな」

「あー……実は」

「ここで先輩に嘘をついても仕方ない、俺は事実だけを述べた。

「実は居候が増えまして」

「居候？鈴木、お前一人暮らしだよな？」

「そうなんすけど」

この複雑に絡まり合つた事情を一体どうやって一般人の先輩に伝えればよいのだろうか。俺が歯切れの悪い解答をしたせいか、先輩はいよいよ怪しげな視線を向けてきた。

「あれか、女か」

「え」

「お前が同棲をするとはな。見かけによらず案外やるもんだ」

先輩は一人うんうんと頷き、恨めしげに俺の首を締めあげた。

「いや、そうじやなくて!! 先輩、話を最後まで聞いてください……!!」

「何だよ、違うのか？」

「違いますよ!!」

しかし、どう説明すればよいのか。

先輩の腕を逃れた俺は、再び弁明の言葉を考えるが上手くいかない。

「いいよ、いいよ。これ以上は問い合わせないさ、まあ仲良くするんだな」

それでもやはり先輩のニヤついた顔は收まらない。俺も適当な愛想笑いを浮かべ、早々にここを離脱しようと思つたが、

「それで？彼女はどんな感じなんだ？」

「だから違いますって……俺がそんな、同棲なんてできそうな男に見えますか？」

「わかつたよ、俺が勝手に思つとくだけにしとく。まあ、でも俺からの助言だが、意外とお前はそういう彼氏彼女みたいなのが必要だと思うぞ。色々と支えてもらえ」

「は、はあ」

年上からのありがたい助言のつもりらしい。先輩は笑いながら俺の背を叩くが、俺にはさつぱりだつた。

「さてと、そろそろ俺は行きますね」

「あ、待て待て」

そういうと先輩は近くの自動販売機でコーヒーを二本買つてきた。

「コーヒー一杯ぐらいの時間はあるだろう?」

「いや、でも」

「俺の初奢りだ」

仕方なく受け取り、俺はコーヒーを口に含む。それは勉強で疲れた体にはとてもよく染みわたり、俺は思わず近くのベンチに腰をおろしてしまった。

「先輩は来年卒業ですか?」

「あー、そうだね。最近不景気だし就職できつかなー」

先輩は笑いながら語っているが、本当の所はどうなのだろう。俺には全く先輩の考えはわからなかつた。不景気—その言葉は俺にも重くのしかかり、返す言葉が見つからない。

「ま、大丈夫だろ。俺、英語はできるし」

「確かにそれだけでも強みになりますからね」

俺は再びコーヒーを口に含む。そして、口から白い息を吐き出した。

「何も変わつていませんね」

俺は大学の風景を見ながら、ぽつりと呟いた。

「……そうだな」

数秒遅れて先輩もうなづく。

「今の俺の言葉の意味、わかつたんですか？」

「なんとなく、な。けど俺もお前もまだまだ若いんだから、そんな爺臭いこと言うな」

「先輩、先輩。先輩はもうアラサーになります」

「うるせえ。それでも社会的にはまだまだ好青年で通る。だからそんな心配することないんじやないか？ただただ現実だけを見て生きて行こうぜ」

「……俺はいつだつて現実を見てます」

「そうか、なら結構、結構。とにかくお前よりも下の条件下の人間はいる。そう思つて生き

て行けばいい」

「……やつぱり先輩はすごいですね」

「だろ？」

先輩は得意げに笑うと、ポケットから煙草を取り出した。そして俺に軽く了解を求める

と、先輩は気持ち良さそうに煙を吹かし始める。

「お前は？」

「いえ、あまり好きじゃないんで」

「まあ確かに吸つてるイメージないもんな。どうせなら一生吸うんじやないぞ」

「言われなくてもそのつもりです」

「なつまいきー」

「そりやどうせ」

「そういうえば、お前の友達の彼……葵つてやつは？最近会つてるのか？」

「葵ですか？まあ、会つて話したりはしますけど。あいつが日々何をしているのかは全く知りません」

「去年はちよちよく見かけたんだけどな、学校は大丈夫なのか？」

「本人に聞いてください」

まあ、あまりいい返事は聞けませんでしようが。先輩は大丈夫か？などと軽く笑いながら、煙草を吸い続ける。

しばらく会話もなく、俺と先輩はぼんやりと街ゆく人々を見ていた。沈黙が心地よい、こういう相手は非常に気が楽だ。

「そうだ」

煙草を一本吸い終えた所で、先輩が思い出したかのように口を開いた。

「鈴木、お前今日暇だつたら酒でも飲みに行かないか？奢るぞ」

「すみません、しばらく十時位までは空いてないです」

「バイトか？」

「いや、バイトは週末なんんですけど。さつき言つた夕飯の支度がですね」

「じゃあ十時ならいいだろ、お前の家の近くで」

「それなら大丈夫です！前に行つた事ある店でいいですか？」

「ああ、着いたら連絡してくれ」

「はい。ごちそうになりますね!!」

俺は尊敬の眼差しで先輩を見据えた。先輩はそんな俺の視線を避けるように、財布とにらめつこする。

「あ、ということは俺と先輩でサシ飲みですか？」

「誰か連れて来たい奴でもいるならいいけど」

「ああ、いえ。先輩、サークルとかに知り合い結構いるんで」

「みんな忙しいんだと……とにかく十時に待ち合わせな」

「はい、それじゃあ」

そう言つて俺は、コーヒーを一気に飲み干すとベンチから立ち上がる。

「行くのか？」

「はい、そろそろ」

軽く手を振る先輩に頭を下げ、俺は大学の出口を目指した。
しかし次の瞬間――

「な、なんで」

「鈴木？」

目の前から顔なじみの女が、俺に向かつて大きく手を振ってきた。思わず固まる俺に、先輩も訝しげな視線を向ける。

「どうした？」

目の前にやつてきた相手は俺たちの視線を気にすることなく、いつもの調子で話しかけてきた。

「聰太 !!」

「……お前、何でここにいるんだ」

曇り空でも銀色に煌めく銀髪。深く透き通つた青い瞳。リニアだ。
いや、リニアが何故、俺の学校にいる。

「いつもながら飯作つてる頃なのに、遅かつたんだもん。迎えに来ちゃつた」

突然の出来事に俺は開いた口が塞がらなかつたが、すぐにはつとなつて後ろを振り返つた。

「が、外国人……」

「Hい？」

先輩は俺以上の衝撃を受けたのか、じつとリニアの顔を見つめていた。リニアもリニアで、先輩が俺の知り合いだと分かると、親しげに手を振つて挨拶をする。

「あれが……彼女が、その、居候か？お前が将来を約束したという……」

「んなこと一言も言つてないでしようが !!」

勢いよく否定する俺の横を通り過ぎ、リニアは先輩に向かつて丁寧にお辞儀をした。

「ここにちは、いつも聰太がお世話になつています。リニア・イベリンです」

先輩は面食らった様子で、されるがままに彼女と握手を交わす。

「あ……えつと、俺の後輩とは一体どういう御関係で……」

するとリニアは何でもない風に、

「私の好きな人です。ええと、つまり……何て言えばいいんだろ」

「おい!! お前!! 違う!! エツと、その……その日本語は違うよ!?」

「オウ!! ワタシ、ニホンゴ、ヨクワカラナイヨー」

全くこいつは……。

大きなため息と共に俺は先輩へと振り返る。先輩は俺たちのコントのような会話を呆然とした様子で眺めていた。

「そ、うか、外、國、人、……頑、張、れ、よ」

先ほどの言葉はいざこへ、先輩は思いつきり現実から目を反らして図書館へと踵を返す。

「先輩!! ちよつ、違いますからね!!」

我ながら見苦しいが、俺は必死に否定の言葉を先輩の背中に投げかける。しかし、先輩は俺の声を全く聞かずに片手を振つて別れを告げた。

「十時にな」

「わかつてますよ!!」

「十時? 何それ!!」

とぼとぼと重たい足取りで去つていく先輩を見送り、俺も幼稚園を目指す。

「ねえ、聰太。十時にどこか行くの? 夕飯は?」

嬉々として訊ねるリニアを余所に、俺は今の会話でだいぶ精神的に疲れていた。

「お前なー、誤解を招くような言い方をするな」

「誤解？ 何が？」

「その……お前が、俺の事を……」

その続きを自分で言うのは妙に恥ずかしい。ちらりとリニアを見ると、やつと彼女は俺が言わんとする事を察した。

「あ、あれ？ 誤解も何も事実だもん。私、聰太が好きだよ」

「え」

「先生も好きだし、奏も好き。みんな大好きだもん」

一瞬びくりとしてしまった俺を殴りたい。彼女はそんな俺の様子を不思議そうに笑っていた。何を期待していたわけでもないが、俺は更に体力を削られた様な心地だった。

「……帰るか」

「うん、ご飯！ご飯!! お腹空いたよ」

「そういや、何でわざわざ迎えにまで来たんだ？」

「あー……うん」

俺の問いかけに、ふと、リニアはきまりが悪そうに俺から視線を反らした。

「朝もしてくれたのに……さすがにこう毎回、子供にやつてもらうのは良心が……ね？」

「料理しろ。お前がすれば全て解決する」

「私、料理できないもん」

「一品くらいは何かできるだろ」

「え、私インスタントラーメンは勝手にできあがると思つてるけど」

「んなわけねえだろ、どこの世界の食いもんだ」

リニアと二人で歩く帰り道は平和そのもので、ああ、俺は普通の日常を過ごせているんだと

思つてしまふ。普通の日常へ、日々に違ひはあれども、きつと後から振り返つてみたら何てことない一日として捉えられるのだろう。今日も同じだ。先輩と久しぶりに会つた。リニアが迎えに來た。

—けれど昨日と今日は違う。

そんな当たり前のことを思いながら、俺はふつと笑みを零してしまふ。

—今日も『今日という日』のために時間が流れている。

ほんの少しだけ『今日という日』に何かが起こりそうで、俺はつい期待してしまつてゐるのかも知れない。

「ほら!! 聰太!! 遅いよー」

「待てつて。一緒に帰るんじやないのか」

「はやくー」

数メートル先で手を振るリニアに、俺はしぶしぶ足を速める。先ほどと何も変わらないはず

なのに、真冬の寒さはどこかに行つてしまつたような気がした。

**

「それで？結局十時に何があるの？」

幼稚園に着いても、リニアは未だに同じ質問を繰り返していた。好奇心故というやつだろうか。

「聰太ー」

別に隠す様なことでもないのだが、あえて言うならば恥ずかしいのかもしれない。

今夜、先輩とのサシ飲みと分かつた時点で俺はいくつか進路相談をするつもりでいた。今後どのような勉強をすればいいのか、いつ頃から準備を進めて行けばいいかななど、来年に向けての参考話を聞こうと思っていたのだ。

しかし、そこにリニアが来るとなると話は変わる。

元々、交友関係の広い先輩だ。リニアと性格が似てるといつても過言ではないだろう。となると、俺の真面目話が端に寄せられてしまう可能性がある。何より、普段から滅多に奢ることのない先輩に誘われたということは、何かしら大切な話があるのかもしれない。そんな場面にリニアを連れて行く気にはどうしてもなれなかつた。

「ねえ!! 十時に何があるのー?」

「うるさい。頼むからついてくるな。それと離れる。洗い物しづらいだろ」

「えー……教えてよ」

リニアは離れない。先ほどからずつと俺の肩に顔を乗せ、同じ質問を繰り返していた。

「いい加減にしろ。俺にも秘密の一つや二つあるんだよ」

「……」

するとリニアは、すっと俺の肩から退いた。やつと重いものが肩から離れてくれたと思った矢先、

「私たちの間に秘密なんて無いでしょ?」

「つ !!」

突然耳元で囁かれた声に、俺は思わずスポンジを落としてしまった。

「おまつ……何するんだよ !!」

「ひどい、命がけで私のこと守ってくれたのに……ああ、あの時の情熱はどこにいつてしまったのかしら……」

「しらん !!」

俺はシンクに落としたスポンジを拾い上げ、再び洗い物をはじめる。先ほどの仕内のせいでもほんのり熱を帯びた頬を冷ますため、俺は今後の計画を立てることに集中した。

——この洗い物を終えたら、掃除して、洗濯して、そういうえば柔軟剤がそろそろ切れてきたんだっけか……

気づくと俺は洗い物を終えていた。無心になつて作業したおかげか、精神的にもだいぶ落ち着いてきたようだ。ふと、顔を上げると居間の方から相変わらずリニアはこちらを睨んでいた。

……誰がつれていくものか。

しかし、彼女は明らかに不満気な表情を浮かべている。

「何だよ」

「別に」

「そうか」

やれやれ、やつとりニアも大人になつてくれたようだ。そう思つて俺は洗面所へと移動した。
洗濯をするためだ。

「えいつ」

ふと、完全に油断した俺の背中に柔らかいものを感じた。

「おい!!な、何すんだ!!」

「ずっと考えてた。何で話してくれないのか。つまりは、私のキンシップが足りなかつた
つてことね!!」

「はあ!? 違えよ!! おい、この馬鹿!! 離れる!!」

「じゃあ十時に何があるか話して」

羞恥心と何か色々なものが混ざつて、俺は必死になつてリニアの体を振りほどこうとするが体力的な差は明らかだつた。

「離れる!! リニア !!」

「話してくれるまで嫌!!」

「……」

「……」

「……わかつた、話すから離れる」

俺の負けだ。このままでは、俺が吐くまで離すつもりはないだろう。

「それで? 十時に何があるの?」

「……」

「聰太」

「その……夕方会ったあの先輩と久しぶりに酒を飲みに行こうってだけだ」

「それだけ？」

黙つて俺が頷くと、リニアは心底つまらなそうな顔で肩を落とした。

「何だよ、しようもない話じやん。それなら何でそんな頑なに話すのを拒んだのよ。私はもつと重要なことでもあるのかと」

「重要な事？」

「たとえば、合コンに行くとか女の子を紹介してもらうとか」

つらつらと指折り数えられていくリア充イベント。明らかに俺とは縁遠い話だつた。

「いずれにしろ、お前には関係ない話じやないか」

呆れて呟く俺とは反対に、リニアは片手に拳を作り、勢いよく俺に向けて放つ。目の前で止まる鉄拳と共に、彼女は口を尖らせて、

「聰太が女に会いに行くなんて、私にとつては一大事件なの!!」

「そ、そうですか」

「突きだされた拳に圧倒され、思わず敬語になつてしまふ。間違いない、この女と付き合う男は一生苦労するだろう。」

「あれ? 十時に行くことは夕飯食べて行かないの?」

「飲みに行くからな。心配しなくとも皆の分は作っていくよ。それに先輩の奢りだから、俺もちゃんと食べて帰る」

「ふーん」

「ちよつと待て、何だ、その顔は」

「べつづにー」

「危険だ、非常によくない顔をしている。

「何を考えてる。言つとくが、絶対についてくるなよ!!」

「えー」

「当たり前だろ!!」

リニアは頬を膨らませて俺を見た。もちろん彼女がこのような反応を見せるのは想定済みだ。後はこのミッションをどうやつてクリアするかなのだが。

「いいか、俺は遊びに行くわけじゃない。真面目な話をしに行くんだ」

「ふむ」

彼女は腕組みをして真剣な顔をした。どうやら理解はできるらしい。

「先輩に会うのは久しぶりだから、今後の勉強とか資格対策とか、色々な経験を聞いて将来に役立つ情報を集めようと思つてているわけ」

「なるほど」

「それにお前の性格上、飲み屋なんて行つたら人の話も聞かずに飲みまくるだろ」

「うつ」

よし。今の言葉がトドメだつたのか、リニアはおもむろに頭を抱えて悩みこんだ。

「それでもお前は俺についてくると言うのか？」

「え、うん」

リニアは即答した。

「……どうして？」

「未来の花嫁だし？」

「誰が誰の未来の花嫁だと？」

「違うの？」

「違う！」

繰り返しだ。いくら俺が拒絶しても、彼女はついてくるつもりなのだろう。ならば妥協策を考えねばならない。互いにwin-winになる方法――

「…………しても一緒に行きたいのか？」

「うん!!」

「はあ……まあ来るなって言つても来るんだろうしな」

「うん!!」

元気な声で返事をするリニアに俺は再び大きなため息を零した。

「わかつた……ただし、酒をたくさん飲むな。大事な話をしている時は黙つて聞いている」と。あの人は俺にとつて重要人物だから」

「わかつた!!」

俺が了承するや否や、リニアは楽しげに部屋を駆けまわった。

一体いくつなんだ、この女……。

実を言うと俺は、相談はもちろん先輩の前で思う存分、笑い話や愚痴を聞いてほしかつたのだ。しかしリニアが来るとなれば、それも満足にできないだろう。色々と恥ずかしく思つてしまふ。近しい人間であればあるほど、弱みなんて見せたくないのだ。

「ねえ、聰太。居酒屋!? 居酒屋行くんだよね!?」

「まあ……何で?」

「私、日本に来て居酒屋にまだ行つたことないの!! 初めて!!」

リニアはキラキラと目を輝かせて居酒屋についてあれこれ聞いてきたが、そこまで期待するものでもないだろう。いや、外国人からしたら新鮮なのか?

「それじゃあ、十時だよな。デート」

「先輩もいるのに何がデートだ」

「でもお店までは二人きりでしょ?」

「……もう勝手してくれ」

圧倒的なテンションの差に、ついに俺はついていけなくなつた。ひとまずリニアの件が落ち着いたところで、俺は家事を再開する。

「……」

ふと、背筋が凍るような感覚を覚えた。

「何だ？」

背後から感じる何か、いや何となく予想はついているのだが、後ろに立っていたのは同居人の小学生、いや奏だ。

「か、奏？どうかしたか？塾いくのか？」

「行かない」

「……遊びにでも行つてきたらどうだ？」

「いい」

「そ、そ、うか」

妙に重たい空気だ。いつも通りの無表情だが、今日は無駄に殺気が籠っているような気がする。要は機嫌が悪いと言う事だ。奏はちらりと俺の隣にいたリニアを見て、再び俺に視線を戻す。

「聰太はでかけるの？」

「え？ ああ、十時ごろな」

「そう」

「うん」

「私も行くよ!! デート、デート」

全く空気を読まずにリニアが割り込んできた。

「何がデートだ!!」

「デート……」

ぽつりと奏が零す。

いかん、奏に誤った認識をしてもらつては困る。

「デートじゃない。あれは無視しろ。ただ先輩に会いに行くだけだ」

「……デートだ」

38.psd

「え？」

「デートでしょ」

「違います」

思わず敬語になつてしまつたが、奏はひたすらに「デート」という単語を繰り返す。どこか寂しげな様子に見えるのは気のせいだろうか。

「奏？」

「ばか」

奏は拗ねた様子で吐き捨て、リニアをしばらく眺めた後、ぱたぱたと自分の部屋へと戻つていった。

「何で」

「年頃の女の子つてことかしら」

俺の疑問にリニアも疑問形で返す。

「お前もあの年代はあんなだったのか？」

「私？ 私もまあ奏と同じような性格だったね、いや、もつと話さなかつたかな。その時はまだ茶髪だし、真面目な優等生だつた」

「それはお前と同一人物の話か？」

「もちろん。その頃、ハンスと出会つたんだだけかな、いやもつと前か」

一人、過去の記憶を辿るリニアを放つて、今度こそ俺は家事を再開する。十時——それまでにやることを終わらせておかなければいけない。

「お、鈴木。やつと来た……か？」

先輩は待ち合わせ場所に現れた俺を見て、一瞬驚きを示した。当然だろう、何故か待ち合わせをした後輩が、若い外国人女性と腕を組みながら登場すれば、誰だって戸惑いを見せるに

違いない。

俺はため息を零したまま、仕方なく口を開いた。

「すみません、先輩。ひとり追加でもいいですか？」

「わからない……何でお前が」

先輩は頭を横に振つて宙を仰ぐ。おそらくOKということだろう。

そして俺たち三人は揃つて居酒屋の扉をくぐつた。

店内の装飾も雰囲気も以前と変わつていなかつた。というものの、大学一年生の頃何度か先輩と行つた事があつたからだ。ちなみに何を飲んでいたかは黙つておこう。

二階奥の窓側のテーブル。外を見ながら飲めるという、先輩イチオシの場所だ。先輩の対面に俺、俺の隣にリニアの順で座るが、彼女も少しは緊張しているのか、ぎこちない様子でチラチラと店内を見回していた。

「さてと。何飲む？」

先輩は席につくや否や、いつも通りの調子に戻つたのか慣れた手つきでメニューを俺たちの前に差し出した。

「いや、奢つてもらう立場なんで先輩が選んでください」

「そこは忘れてなかつたか……まあ、でも食いたいもの頼んでいいぞ」

「俺としては話をしに来たようなものですけど」

「いいから、いいから。好きなもの頼め。後輩に奢つてやる金くらい俺だつてあるさ」

「はあ。それじゃあ……」

俺は適当にメニューを選んで注文をしていく。そんな俺を、リニアは溢れんばかり的好奇心を込めた瞳で見つめていた。そして店員が去ると待つていたかのように口を開く。

「ねえねえ、聰太!! 生ビールって普通のビールと何が違うの?」

「そういえばお前、居酒屋は初めてつて言つてたな。生ビールっていうのは、あれだよ。あのポンプみたいなやつから一回一回出してくれるやつ。まあ、出来たてみたいなもんだから普通のビールよりは美味しいんだよ」

「へえー!!

感嘆の声を上げるリニア。そんな彼女を先輩は訝しげな目で見ていた。

「ところで、鈴木」

「何ですか？」

「俺は彼女がどんな人か詳しく聞いていないんだが。一体何者……どういう人かきちんと紹介してくれないか？」

「えっと……」

そういうえば彼女だなんだとは揉めていたが、肝心のリニア自身については何も話していないかった。しかし、何て言えば良いのだろう。協会はおろか魔法士なんて話も信じてくれなさそうだし。

「た、只の友人ですよ」

「いや、そういうことじやなくて。留学生とかか？」

「留学生ではないけど……これでも立派な社会人で、今は休職中というか」

「休職つて日本で？こっちに家があるのか？」

「えっと、まあ……はい。怪しいやつじやないですよ」

重要な所はぼかしたままだが、簡潔に言うならば今言つた通りだろう。しかし案の定、先輩のリニアに対する疑いの目は晴れていなかつた。

「……その返答なんだよ？怪しいとしか思えないんだけど。それとも俺、馬鹿にされてんのか？」

「そんなつもりはないです!!」

くそつ……一般人により分かりやすく説明するにはどうしたら……。

ちらりとリニアを横目に見るが、彼女は先輩の顔をきょとんとした表情で見つめていた。そして平然と口を開き、

「私の名前はリニア・イベリンです。出身はドイツ。大学は出てます。今は休職中で、日本に来ました」

何食わぬ顔で自己紹介を始めたリニアに面食らつたのか、今までだいぶ先輩の態度が和らいだ気がする。

「えっと……何で日本に来たんですか？ドイツにいても良かつたんじや」

「恩師、お世話になつた人が日本にいて遊びに来ているんです。その人の家、大きくてつい長居しちゃつてるというわけです。ちなみに聰太とは仲良しです」

「余計なことは言わんでいい」

先輩からの質問は更に続いた。

「……二人は付き合っているのか？」

「はい」

「いいえ」

ほぼ同じタイミングで俺とリニアは正反対の答えを述べた。

「……どつちが正しいんだ？」

「当然俺です」

「もちろん私です」

またしても同じタイミング。

先輩も諦めたのだろう。大きなため息をつき、やれやれと背中を椅子に預けた。微妙な空気が流れる。しかし、リニアは先輩の様子を気に留めることなく、ずいっと身を乗り出して、

「すみません、あなたの名前は？」

「俺？」

「はい、聰太が先輩先輩って言つてるけど、肝心の名前がわからなくて」

「ああ、そういえばそうだつたね。俺は前田総一郎。よろしく」

そう言つて二人は握手を交わした。

「前田さん、聰太って学校ではどんな感じなんですか？」

「うーん、最初は冷たい奴だと思つた

「冷たいやつ？」

先輩とリニアはすぐに親しげに会話を始める。二人とも改まつた態度は好きではない方だ。

案外、相性としては合う気がする。

「こいつ元々口数は少ない方だけど、最初の頃は張り詰めた空気がしてたっていうか話しかけにくい雰囲気だつたんだ。それがある日から徐々に柔らかくなつていったかな」

先輩と会つた最初の頃……おそらく三年前の事件を引きずつっていた頃だろう。確かに気軽に話しかけてもらえる雰囲気ではなかつたという自覚がある。

「へえ……それで何がきつかけで仲良くな」

「ビール三つです!!」

リニアの質問を遮るように店員がビールを持つてきた。俺たちは何も言わずに揃つてグラスを手に取る。まずは乾杯をしてからということだ。

「……」

「……頼んだ、鈴木」

「え、えつと……乾杯 !!」

非常にぎこちない音戸だつたが、潔い飲みっぷりだ。リニアに至つては一気にグラスの中身

を全て飲み干してしまった。

「あー!! おいしい!! おかわり!!」

「お前、仮にも先輩の奢りなんだから少しは遠慮を……」

「鈴木。そういうお前も『奢り』って言葉を強調するのか」

「それで?さつきの続きをお願ひします。二人が仲良くなつたきつかけは?」

二杯目のビールを片手にリニアは嬉々として先輩に話しかける。

「そんなに気になるのか」

「気になる!!」

「別に俺は普通に過ごしてただけなんだがな」

俺がそう呟くと、先輩は大きな声で笑い出した。

「確かにそうだつたな！」

そしてビールを一口飲むと、先輩は去年の話を再開した。

「ある日鈴木が一人で学食を食べていたんだ。いつも人を寄せ付けない雰囲気の奴が、皆と同じものを食べているのがなんか面白くてな。一緒に食べようと思つて、わざとこいつの前に座つたんだ」

「それで？」

「こいつ最初は俺がいるのに気づいてなくて、ふと顔を上げた瞬間、学部の先輩である俺の顔に気がついたんだ。そんで驚きのあまり盛大に飯を零した。あれは面白かつたな」

先輩はくすくすと当時を思い出して笑う。俺も先輩との出会いは覚えていた。人前であれだけ恥を欠いたのも滅多にない。

「それでそのまま片づけていくのが普通なのに、鈴木のやつはな」

「……先輩、そこまでにしましょう」

「最初に出た言葉が『俺の400円が……』だった。こんなネタにしかならないだろ!?」

先輩とリニアは腹を抱えて笑いだした。俺はひたすら先輩から視線を逸らすしかない。

「普段ぶつきらぼうで話しかけにくい奴だと思つていたのに、あんなに面白い奴だとは思わなかつたな。こうしてあれ以来、俺は何かと鈴木に構つてやつてるというわけだ」

「別に構つてもらつてるつもりは……」

ふいと先輩から顔をそむけると、横でリニアが楽しそうに笑つていた。妙に恥ずかしい。

「ちょっと先輩、そんな昔の話もうやめましょ!!」

しかし先輩は俺の抗議に構うことなく、依然として去年の話を続けた。

「鈴木が言うには、皆とも話そうと思つていたらしいが、タイミングが掴めずに段々と面倒臭くなつていただけだつたらしくてな。それで俺が暇な時相手をしてたら、いつのまにか仲良くなつてたつてわけさ」

先輩の説明は非常に簡潔且つ、嘘偽りのない事実だった。俺は一年の頃、サークルにも学部内にも僅かの知り合いしかいなかつた。先輩と仲良くなり、色々な行事等に連れまわされたのだが、それでも俺はそんな生活が嫌ではなかつた。

去年の初々しい頃を思い出し、俺はひとり、少しだけ情緒的な気分に浸つてゐる中、リニアはずっと先輩から俺の学内生活について色々と訊ねていた。

そして俺の視線に気づくと、彼女はふわりと赤みを帯びた顔で笑う。

「私の知らない聰太がたくさんいて、すごい新鮮」

それはー、

「……まあ、お互いすごい離れた場所にいたからな」

急いで俺は正面へと顔を戻した。あんな近くでそんな風に言われたら、誰でも照れるに違いない。

「逆にお嬢さんが知つてる聰太はどんな感じ？ 勉強とバイトしか頭にないつまらない奴？」
先輩の問いかけに最初こそ笑っていたリニアだが、すぐに腕組みをして真剣な顔で考えだし、そして再び笑顔に戻ると、

「確かに聰太は勉強とバイトばかりだけど、仕事ができたら嫌々言いながらも結局手伝つてくれるから……つまらない奴とは思つてないです」

「……確かにつまらない奴じやないね」

その点に関しては先輩も同意らしい。

「だから本当に頼もしい友人です。私が大変な時も、辛い時も、いつも隣にいてくれて……まあちよつと鈍いところもありますけど」

「俺が鈍い？」

「鈍い !!」

アルコールのせいもあり、リニアの声はいつも以上に声が大きい。これは下手に話を広げたら面倒臭い奴だ。俺はリニアに言われるまま、云々と領き返していたが、ふと、彼女は思い出したようにビールへと手を戻した。

「それにしても、私が聰太と初めて会った時は、もつと丸かつたのにな」

「へえ、そなんだ。じゃあ今度は高校の頃の鈴木を教えてくれよ」

先輩とリニアは俺という共通のおもちゃをネタに、随分と親しくなったようだ。

「聰太はね、本当に良い奴だったの」

「へえ」

「よくない事が起ると、眞っ先に駆けつけてくれる。とても情熱的な人でした」

「それは意外だ、『俺の400円……』の高校時代がそんな感じだったとは」

「まあ、今でも根っここの部分は変わつてないと思いますよ。ね？」

リニアはニコリと笑いかける。

「俺が知るか。俺は今も昔も変わらない、ただただ日々を過ごしてゐただけだ」

「もう。面白くない反応」

彼女は唇を尖らせて、拗ねたようにそっぽを向く。やれやれ一先ず俺の話は終わつたのだろうか。そろそろ違う話題に行きたいのだが。

そう思つて、俺もビールへと手を伸ばす。もう中身も終わりそうだ。お代りを頼んだら、今度はもつと真面目な話をしよう。と、その瞬間。グラスを掴もうと思つていた俺の手の目の前に違う手が

「えいつ」

「あ !!」

リニアが俺のビールを手に取り、一気にグラスを傾ける。

「ふはーっ」

「おい、リニア !! それは俺のだろ !!」

彼女はしたり顔で俺へと振り向く。先ほどの返事が悪かつたせいか、いや、ただの酔っ払いだからか。仕方なく、俺は二杯目のビールが来るのを待つことにした。

「そろいえば、先輩。学校の方は大丈夫ですか？」

互いにお代りが来たところで、俺は先輩へと問いかける。だが先輩は俺の質問を聞くなり、眉間にしわを寄せ、

「何故、酒を飲む場でそんな話をしなければいけない」

「……重要な話があるから俺を誘つたんじやないんですか」

「俺はただ単にお前と飲みたかつただけだ!!」

「本当ですか？」

「俺がお前に悩みなんて話すと思つたのか?」

「え、まあ」

「俺は本当にただお前と酒が飲みたかつただけだ」

「この人は……大丈夫なんだろうか。

俺が黙つてしまつたせいだろう、今度は先輩が俺に問いかける。

「お前こそ悩みでもあるのか?」

「いや、そういうわけでは」

「そうだろ。大体、こんな所に悩みなんて持つてきても解決なんてすることない。本当に悩んでいるなら、もつと親身になつてくれる人にちゃんとした場で打ち明けた方がいいに決まつてる。親でも親友でも」

そこで先輩は、一度言葉を切つた。そして、リニアをちらりと見つめ、

「女友達でも」

「はあ」

「……」では否定しないのか

「あ、はい。友達なんで」

すると、突然リニアが俺たちの間に顔を出した。

「今は!! いずれ聰太は私と付き合うんだから!!」

「はいはい」

「ちょっと!! 適当に流さないで!!」

彼女は俺の服の裾を摘んで揺する。ここで抵抗する気力も今の俺にはなかつた。そんな俺たちの様子を先輩は軽く笑いながら眺めている。

「鈴木、案外お前にはこういう彼女が合うのかもしれないな。お嬢さんはコイツのどんな所

が好きなんだ?」

顔は笑つてゐるもの、先ほどからずつとおつまみの枝豆を飛ばしてきている。おそらく内心穩やかではないのだらう。

「全部……かな」

「ほう」

「歩く姿も食べる姿も好き。料理もしてくれるし、優しいし、顔もまあ合格点かな。たまに冷たくしてくれるのも魅力的」

「ははは!! 本人目の前にしてここまで言う女も初めて見た!! 面白い!! 鈴木、お前本当に良い人を手に入れたな!!」

「いや、その……別にいるないというか」

「まあまあ、そう恥かしがるな。仲良くしろよ」

「いや、あの先輩」

「こんな良い人と知り合うのも簡単じゃないんだ」

そこで先輩は一息つくと、

「とにかく俺が言いたいのはな、悩みがあるなら悪戯にこんな所で話しても仕方ないってことだ。眞面目な話は飲み屋ではするな。ちなみに、俺はお前に悩みを打ち明けるつもりはない!!お前は大事な弟分だからな!!」

そう言つて先輩はグラスを傾ける。

誰がどんな悩みを持つていても、どんな気分でも、絶対に態度を変えない。前田先輩はこういう人だ。いつも通りの態度で接してくれる。いつも通りの先輩のやり方で話してくれる。これは本当にありがたいことだと俺は思う。

「そういうえば先輩、資格勉強以外に何かしてるんですか？バイトとか」

「いや、ご存じの通り単位がアレだからね。一応冬期講習受けてるよ」

「へえ、有料のですか？」

「ああ、おかげで今月は結構ギリギリなんだがな。まあ仕方ない」

「しつかり単位取ればよかつたんですよ……」

「そうは言つたものの、今俺が口付けているお酒も先輩の貴重なお金だと思うと、一気に気が引けてきた。そんな俺の僅かな変化に気づいたのか、先輩は大丈夫だと言つて肩を叩いてくれる。

「それはそうと、リニア・イベリン……だけ？珍しい名前じやないですか？ドイツからつて言つてたけど、日本はどんな感じ？」

「うーん。ドイツから来たつて言つても、ここ三年間はずつと色んな国を回つてたんで本当に来たばかりつて感じなんですよね。だからまだまだ知らない事だらけで」

「へえ」

「うん、それでも思う事はあります。実際に色んな世界回つてみたけど、結果的に人間が住むところはみんな同じなんだなつて。特にこういう都市はどこも似たり寄つたりです。もちろん田舎は色々と違つてきますけど」

「そんなものなのか」

思わず俺も感嘆の声を上げてしまつた。

「めつたに私も他の国の話はしないもんね。初めて来た時は色々と話してあげようと思つて

たけど、聰太がいいつて言うから」

「そうだつけ」

「そうだよ」

しまった。またひとり先輩を置いてけぼりにしてしまった。恐る恐る先輩の顔色を伺うと彼は笑いながら、懐の煙草を取り出していた。

「つまり、日本に対するイメージはそこまで悪いものじやないつてことか」

「もちろんです!! 大切な人たちがいる国、私にとつても大事な国です」

「だつてよ、鈴木くん」

「……そうですね。何か?」

俺が言葉を返すと、先輩もりニアも不満げな顔を浮かべる。どういう反応を返せばよかつたのか。

「もうこいつの話はいいですよ。話題変えましょう」

すると先輩は、妙に真剣な顔をしながら口を開いた。

「俺が今行つてゐる冬期講習の先生が面白い授業を教えててな、今まで安田先生つて人が教えてたんだけど仕事ができて新しい人に代わつたんだが、それが外国人ですごいんだ」

「すごい……？」

「なんというか、典型的な学者タイプというか、政治家？」

「先輩、学者と政治家では大分違いますよ」

俺の突つ込みを受け流し、先輩はなおも神妙な顔で頷く。

「だからそれが不思議なんだ。学者の雰囲気なんだけど、態度とか思想が政治家っぽいって言えばいいのかな」

「うーん、教授つて言つても色々ありますけどね」

すると今度はリニアが口を挟み、

「私の大学にもそんな人いたよ。すごい奇発な感じの教授とか」

先輩は俺とリニアの反応を受け止めながら満足げに頷く。そして再び口を開いた。

「その教授が教える授業も面白いんだ。鈴木、お前明日一度受けてみたらどうだ？ 来年の専攻選ぶときに役立つかもしれないぞ」

確かに有料講座だし、将来的に役立つかもしれないな。俺が頷くと、先輩は隣のリニアにも顔を向けた。

「君も一緒にどう？」

「え、私も？」

「楽しいよ？ 外国人なのに日本語も上手だし、口コミが広まつて冬期講座受けてない人も紛れてるとかって噂もある位だし」

俺とリニアが興味深げに聞き入つてると、更に先輩は語り出す。

「たしかアメリカ？ カナダだったかな。北米の出身で有名な大学で教授をやつてる人なんだ」と。どうだ、鈴木。明日行くか？」

「じゃあ、行きます」

「行くの!?」

すると今度はリニアが驚いた表情をする。

「少し興味あるし、専攻選ぶときの参考になるかも知れないし」

「べ、勉強していくつてことだよ？」

「いや当たり前だろ」

こいつは何が言いたいのか。

俺が不思議そうにリニアを見ていると、彼女は突然ぶつぶつと何かを言い始めた。

「そ、それはつまり私も一緒に行くとしたら、一緒に登校して……一緒にお昼を食べて、一緒に図書館に行つて、一緒に下校するつてこと？」

「そうだろ」

俺の返事を聞くや否や、突然リニアは先輩に向かつて身を乗り出した。

「そ、それって本当に私も行つていいの!?」

「大丈夫だよ」

先輩がにこやかに答えると、リニアはガツツ。ポーズをして立ち上がった。相変わらず変な女だ。

「先輩、もしかしてこれを言うために今日俺を誘つたんですか？」

「まあ、それも少しある。お前の場合、少しくらい真面目な話がないと拗ねるだろ」

「別に拗ねたりしませんよ!!」

急いで否定するも先輩は笑う事をやめない。

「たまにはしようもないこと考えてもいいんだよ。お前は目の前の事を全部受け入れれる性格してるから、真面目な話は少しだけでいいんだ。それにお前の場合、意味もなく酒を飲むのも嫌だろ？先輩からのありがたい気遣いってこと」

そう言つて先輩は誇らしげに胸を張つた。

「そう言えば先輩。その教授の名前は？」

「何だつけな、たしか……ハイティントン。エドモン・ハイティントンって言つてたな」

翌日。

先輩に教えてもらつた教室の前には俺一人がいた。リニアも一緒に行くとは言つていたものの、見かけより酒が弱い彼女は昨晚、幼稚園に戻る前にダウンしてしまつた。結局俺が彼女を背負つて帰つたわけだが。

そのような経緯で俺は今、先輩が言つていた講座を受けている。金髪の外国人先生は、英語を交えながらも非常に流暢な日本語で講義をしており、一般的の教授と変わらないほど聞きとりやすい内容だつた。講義自体も普通のものとさほど大差は無い。

先輩が面白いと言つていたのは何だつたのだろうか。そんな事をぼんやりと考えながら受けていると、あつという間に三十分もの時間が流れていった。特に物珍しいこともない退屈な授業に、思わずため息を零す。

そしてちらりと窓を眺めた。きっと顔には情けないと書いてあるだろう。講義が始まつてか

ら気づいたのだが、先輩の姿が見当たらない。昨晩はそこまで酔つていなかつたはずだ。おそらく面倒臭かつたのだろう。つまり何が言いたいのかと言うと、俺は先輩に騙されたのだ。

「いやいや、ポジティブにいこう」

俺は心に積る重たいものを払うように、顔を上げた。そうだ、仮にもこれは講義だ。必ず俺のためになる内容があるはずだ。

事実俺のほかにも生徒はおり、彼らは俺とは違い、熱心な様子で授業を聞き入つていた。俺だけがこんな気持ちでいるのは失礼ではないか。

「しかし」、薦めた人間はサボり。一緒に来ると言つてた人間は寝坊

どうにも意欲的になることは難しかつた。

「大体、これは何の講義なんだ……」

「それじやあ、最後に今までの流れを整理してみましよう」

気がつくと講義は終盤に差し掛かっていた。六十分講義なのか。

さつさと終わらせて昼飯を食べに行こう。その後は普段通り、図書館に行つてー、

「一般的にコミュニケーションというものは、情報や意思の伝達、それを解読する過程を言います。よく『言葉の意味が解らない』という言葉がありますが、これはまさに相手が自身の言った言葉——情報、あるいは意思を解読できない時に使われます。そこではコミュニケーションは成り立っておりません。我々はコミュニケーションを成り立たせるために、相手に自身の意志を伝える努力をしなければいけません」

生徒を前に講師は熱心に語った。三十代半ばの西洋顔に綺麗な金髪が映える。一見気難しそうな外見だが、あまり整っていないひげがラフな印象を与える。雰囲気にも見える。

「コミュニケーションを成立させるためには、まず情報あるいは意思を持つている者と、それを受け取る相手が必要です。しかし、テレビのニュースやマスメディアはコミュニケーションとは言えません。あれらは情報を一方的に流すのみ——というのもありますが」

そこで彼は言葉を切ると、口元に手を当てて考え込んでいた。

「ええと……すみません。上手いこと合う日本語が見当たらないというか、難しいですね」

照れくさそうな表情で外国人教師は謝罪する。すると、よくあることなのか周囲の生徒はくすくすと笑みを零していた。

「まあ、これも私という個人の考え方なので、皆さんは皆さんで独自の考えを出して下さい

ということにしましよう。大体、こんな難しい題を六十分で説明できるわけがないですからね」

困ったという風に両手を上げると、講師は再び生徒に向かって口を開く。

「よく本ではコミュニケーションは符号を解読する事と言われていますが、人と人の対話で解読するのは頭ではなく心です。コミュニケーションは相手を理解しようとする行為だと、私は思うんです」

まるで語りかけるように話し終わると、講師は今までとは一転して気楽な様子で身体を伸ばした。

「元々、この講義は別の方が担当する予定だつたんですけどね、偶然私のところにこの大学で親交のある人間から連絡があつて来たんです。誰も生徒がいなかつたらどうしようかと思いましたけど、良かつたです。皆さんありがとうございました」

最後にと講師はぐるりと教室中を見渡す。だが俺の方を見ると、どこか確かめる様な視線でしばらく見つめていた。

俺が正規の受講生じゃないとバレたか……!? 申し訳ない気持ちで俺はさつと視線をずらすと、しかし講師は暖かな笑みを向けてきた。

「誰かに連れてこられたのかい？」

「え？」

「見かけない顔だつたからね。知り合いにでもこの授業に出るよう勧められたのかい？」

俺は意味がわからないと言つた顔をしていたのだろう。講師はニコニコと笑いながら再び口を開く。

「生徒たちには言つておいたんだ。自分の代わりに誰かを出席させれば本人も出席扱いになるつてね」

やはり俺は先輩に騙されただけだつたのか。予期していた真実を打ち明けられ、一気に疲れが出てきた。そんな俺を周囲の生徒もニコニコと笑いながら見ている。なんだか不思議な気分だ。

「とにかく最後まで聞いてくれてありがとうございます。それでは最後にー、この講義は冬休み一杯で終わりです。おそらくあなた方が私と会う事ももうないでしょ。それでも私の授業を通して、より一層あなた方が学問への追求を深めてくれる事を願っています。我々が勉強するということは、人間的好奇心や名譽、金銭など様々な理由がありますが、やはり私はこれに尽きます。勉強をすれば一人の人間として自身の役割を果たす事が出来る

可能性がより広がると。これが我々が勉強一すなわち何かを学ぶ理由だと私は思つております。それでは、これで本当に最後にしましよう。ありがとうございました』

講師が深々とお辞儀をすると同時に、終了のチャイムが鳴り響く。生徒たちも各自帰宅の準備を始めだした。俺も教室を後にしようとしたところで、ふと、講師が俺の目の前に立つている事に気付いた。

「あ、あの」

「君、少し付き合つてくれないか?」

**

四階の学科研究室。講師の後に続いて俺も中に入った。研究室内は思つていたより片付いて少し意外な印象だ。

「臨時の場所だからね。そこまで私物はないんだ」

まるで俺の考え方を見透かしたかのように答える講師。ただできさえ普段近づかない場所にいるせいか、やけに心臓の鼓動が早まっていた。

「ふむ、結構疲れたね。さて、君は知り合いの薦めで来たということで良かつたんだつけ？」
「は、はい。知り合いの先輩に勧められて」

「大丈夫だよ。そういう生徒はよくいるんだ。それにしても随分と疲れて見えるね、バイトや勉強で忙しいのかい？」

「そうですね。でもまあ他の人も同じように大変でしょうから。それに今日疲れているのは……昨晩遅くまでお酒を飲んでまして」

恥かしかつたが、実際昨日はバイトに行つてないので思わず本当の事を漏らしてしまった。すると講師は呆れた表情を見せるでもなく、大きな声で笑い始めた。

「つまり二日酔いということか！」

「は、はい」

先ほどの講義をしている様子とはまるで違う。とても気さくで話しやすい雰囲気だった。

「先生はどちらの国の人ですか？」

「私？私はオーストリア人だよ」

「日本語上手ですね」

「そう？ありがとう」

当たり障りのない会話を終え、研究室内は沈黙に満ちた。特に話す内容もなく微妙に気まずい。

「えっと……何か話があつたのでは？」

「ん？あー……そうだね。特にはないよ。ただちよつと君と話してみたかつただけだ。この部屋に来たのは君が二番目でね、中々誰も来てくれないんだ。だから時々遊びに来てくれる」と嬉しいんだが

「は……はあ」

要は雑談相手が欲しいのか。あの時偶々目が合つてしまつたから、連れてこられたのかもしれない。

彼と話をしたくないわけではないが、どこか気まずい。俺は早々にここを出るべきと判断し、ゆつくりとドアの方に後ずさつた。

「えっと、すみません。ちょっとこの後用事があるので」

「そうか、またきてね。鈴木聰太くん」

「……どうして俺の名前」

「出席簿に名前があるじゃないか」

「……俺はさつきの授業、正規に登録していないはずですけど」

すると講師は、あつと小さく息を漏らし、

「最初にアンケート用紙を渡した時に見たんだ」

そういえば一番初めに何かのアンケートで名前を書いた覚えがある。つい自分の名前を書いてしまい、正規の生徒ではないかとばれるか不安だった。しかし、名前を書いただけで俺だとわかるのか。

妙な気分に囚われたものの、俺は再びドアノブに手をかけた。

「それじゃあ、失礼します」

「うん、また遊びにおいでね」

そして俺は研究室のドアを閉める——その瞬間、

「そういえば、金色の魔女は息災かな」

聞き間違いだらうか。

金色の魔女——先生を知っていた? 何故? どういうことだ?

俺はドアノブを握りしめたまま、たつた今出てきた扉を見つめていた。入る時とは違う、それは巨大でとても重たい鉄の扉の様にさえ思えてしまう。

俺の聞き間違い、きっとそうだ。そうにきまつてある。研究所の人間が大学内にいるわけがない。頭の中で必死に自身にそう言い聞かせるも、体は正直だった。額に浮き出る冷や汗が止まらない。俺は急いで階段を駆け降りると、逃げるようにな学校舎を後にした。

「やばい、やばい、やばい!!」

大学構内の敷地を全速力で走り抜ける女性。彼女の額には冬だというのに、うつすらと汗がにじんでいた。服装もやや寄れており、慌てて家を出てきたことが明らかである。

「もう!!あのバカ、起こしてくれてもいいじゃない!!私の記念すべき初登校がー!!」

構内に虚しくこだまする彼女の嘆き。彼女ーリニアが目覚めたのは、昨晩鈴木と約束した講義の終了十分前だつた。勢いよく飛び起きた彼女は転がるように幼稚園を後にして、ここまで走り続けてきたわけだがー、

「やっぱり遅かつたか……」

教室内の生徒は僅かしかおらず、彼らもすぐに教室から出て行つた。案の定、彼女は講義に間に合わなかつたのだ。だが、学内デートの夢が潰えたわけではない。リニアは顔を上げると、再び構内を走り出した。

「きっと聰太は図書室にいる……!!」

入口で見かけた構内図を思い出し、リニアは一直線に図書室へ向かつた。

「たしかこの駐車場を抜けた先に……」

ふと、彼女の視界に車の前で佇む女が映つた。何てことはない、特に気にすることはない一場面。リニアはすぐに視線を戻し、図書館へと足を進める。

「……」

その後ろ姿を女はじつと見つめていた。それはまるで驚きと怒りを混ぜた様な冷たい視線で。

「おや？誰かと思つたら私の研究室お客様第一号のゴトー君じゃないか」「変な呼び名はやめる。リニア・イベリンを発見した」

女の発言に男は豪快な笑みを浮かべる。

「ほら。ゴトー君、君も笑つて。笑顔は幸運を運んできてくれるよ」

男が呼びかけるが、それでも彼女は眉ひとつ動かさず彼に冷ややかな視線を送った。

「それで、ゴトー君。リニア・イベリンはどこで見たんだい？」

「図書館に向かっていた。鈴木聰太を探しているようだつた」

「ほう」

女は余裕げな表情の男に一步近づくと、

「ここに鈴木聰太が来たらしいな」

「ああ」

「今後はどうする」

78.psd

「さあ。それより私は、何故今も君が私の傍にいるのかが知りたいね」

ニコリと笑いかける男に対し、ゴトーは、やはり感情のわからない声で返答する。

「私はベルコルと約束した。お前の護衛をすることを」

すると男は自身の髪を触りながら、ふと声のトーンを重くした。

「ゴトー君、急進派は瓦解した。君が私を守る義理はない。ベルコルはもう死んだんだ」

「黙れ。お前のような人間に指図される謂ではない。ベルコルと約束したから、私はお前の傍にいるだけだ」

「やれやれ、それは有り難いことだ」

淡々と自身の主張を述べるゴトー。その物言いにどこか好感を持ったのか、男は再び表情を戻して笑いかける。

「それにしても、相変わらず綺麗な黒髪だね」

「な……!!」

「ああ、そんな恥かしからなくていいよ」

「つ……!!」

ゴトーは込み上げてくる怒りに耐えられなかつたのか、顔を真つ赤にして勢いよく扉を閉めて出て行つた。そして研究室には再び静寂が戻る。

「普段なら誰も来ない場所に二人も来てくれるとは……良かつたな、ハイティントン」

男は自身の名前を口にし、ふつと笑みを浮かべた。

「さて、これからどう動こうか」

ゴトー・フリードリヒ。これは彼女の名前だ。一見男性のようにも思われる自身の名が、彼女はあまり好きではなかつた。そのため誰かに自身の名前を呼ばれると、自然と顔が強張ってしまう。その癖は大人になつてからも治る事はなかつた。

彼女の家系は数少ない、古くから研究所と縁深い家柄だつた。彼女の両親は共に研究所で働

いており、幼いころから彼女も研究所を出入りしていた。それ故、彼女が研究所の一員となるのも必然のことだつた。

しかし、彼女が所属したのは両親とは正反対の思想、異端集団とも言われていた急進派だつた。

急進派。研究所内で最も極端な思想を掲げる集団。血が流れなければ成果は出ないと考え、早くから協会と対立する道を選んでいた。1600年以後、度々協会と揉め事を起こしてきた彼らは、自然と研究所内でも危険視され、後に彼らの歯止め役として穩健派と呼ばれる集団が出来たのは当然のことだつた。

急進派と穩健派、双方の思想は異なれども共に歩んできたのは確かだ。急進派の出す犠牲を糧に穩健派も高い知識を得る。それは研究所の発展にもつながる。

ところが近年、彼らの溝は深まつていた。

そもそも個人主義の集まりとして創立された研究所であるそれは、義理や人情というものは一切皆無であった。この創立当時の思想は二種類の人間に分かれて受け継がれている。

個人主義という思想を色濃く受け継いだ者たち。彼らは原論主義者と呼ばれる者たちだ。急進派でも穩健派でもない彼らは、組織がどのようになつても全く関係ない。彼らが研究所に

入った理由は研究をするためであり、これといった思想は持っていないのだ。それでも彼らは研究所内の人間に白い目で見られる事はない。事実、彼らの成果は研究所の繁栄には欠かせないのだ。

そして創立当時の思想そのものを最も受け継いだ者たち（その最たるものたちが急進派と呼ばれるのだが）は、協会の存在そのものを否定する者たちだ。協会の行動は世界にとつて間違っていると信じて疑わない。そこで団結したのが彼らだつた。彼らは原論主義者とは違い、研究や個人的な活動は行つていなかつた。しかし、協会との対立では話が違う。協会と対立する時のみ、彼らは一團となつて戦うのだ。

だが、彼女は知つていた。間違つているのは自分たち研究所側だと。それでも彼女は研究所側につくしかない。研究所と関わつた家系に生まれ、当たり前のように彼らの思想を受け入れていたからだ。誰よりも研究所側の行動を知つていても、彼女はそれらを止める事も異議を唱えることもなかつた。何より彼女も協会の姿勢だけは、どうしても受け入れられなかつたからだ。今あるものー、現在だけを重視するのはおかしいと。

「寒い」

ゴトーはふと、心中にそんな感情を抱きコートの裾を微かにつまんだ。

—急進派に入った理由。

彼女自身、おぼろげな記憶ではあるがこれだという確信はある。

幼いころ、両親に手を引かれて研究所へ行つた時の記憶だ。自身の両親と談笑している若い青年。外見は若いが、どこか大人びた—老いたといつてもいいだらう雰囲気の青年。

ゴトーは何故か彼から目を逸らす事ができなかつた。やがて彼女の視線に気づいた青年は、ゆつくりと腰を降ろして彼女の頭をなでる。とても幼い時の記憶だが、彼女は覚えていた。

その後も彼の傍を離れなかつたゴトーを見て、両親は大層不安げだつた。

正確な年齢もわからず、自身らの思想とは異なる男。しかしゴトーはそんな彼に惹かれて行つた。年齢不詳の怪しげな雰囲気、感情を表に出さない行動。

そして彼女は急進派に所属する事を望んだ。親の激しい反対も退け、自身の研究に没頭する日々。急進派の一員として彼女は様々な事を学んだ。

そして今から数年前の大事件。etcの能力は前回の保持者の記録が研究所内には大量に保管されている。それを元に彼らはその能力に対抗するための手段を考えるのだが、あの事件は

違つた。今までに確認されていないetcの能力——自身の運命を開拓する力『ing』。この前例のない特異能力は研究所にとつて非常に驚異的な存在だつた。

当時、研究所内では激しい論争がおこなわれていた。ing保持者の青年をどうするか。急進派はもちろん彼を処理する事を主張したが、稳健派はそれを断固として反対した。何も知らない未来ある青年を無残に殺すとはいかがなものか。と。

ゴトーは彼らの論争を冷たい表情で見ていた。今まで大勢の人間を犠牲にしてきた彼らが、青年ひとりの命をそこまで惜しむのが滑稽で、愚かで、理解しがたかつた。

呆れたようにその場を去ろうとした中、彼女の背後で上がつた声。それは原論主義者の中でも最も原論主義者らしくない、稳健派と急進派の調停役とも呼ばれていた男——エドモン・ハイティントンだつた。

「私も青年を殺す必要はないと思う。急進派の君たちが言いたい」ともわかる。だが、今の時勢を考えてみてくれ。無残に殺す必要もないだろう」

そう言つて彼は話を続けた。彼が提示したのはある可能性の話だつた。「etcの文書」。伝説、幻と呼ばれる書物。それが協会の旧支部であるパリの地下室に隠されているという話だ。

「etcの文書。これは人間が持つてゐる特殊能力etcを学問化したと言われてゐる噂の書物だ。君たちも耳にした事があるだらう。私が言いたいのはこうだ。青年を拉致し、彼の能力を利⽤してetcの文書を探し出す」

当然の「」とく、室内は嘲笑と失笑で満たされた。それでもなお、ハイティントンは冷静な聲音で続ける。

「十二年前、etcの文書が盗まれたと言う情報。あれは真実なのかもしない。十二年前、これは金色の魔女が目覚めた時期と重なる。仮にこれを盗んだのが彼女でないとしても、盜難という言葉が出る以上、それはetcの文書があるという可能性を充分高める証拠のひとつだらう」

『青年を殺さず、野放しにもしない』

ハイティントンの意見には多くの異論があつたが、急進派と穩健派のトップの合議により結果的には肯定された。そして後にingノロックと呼ばれる大事件が起つたのだ。

結果は悲惨だった。

急進派は壊滅的な状態に陥り、穩健派もかなりの被害を被つた。ゴトーの両親もこの事件で命を落とってしまった。彼女が急進派に所属してから、一度もまともな会話をせずに別れる

ことになつたのだ。

その後、事件を先導した急進派は弱体化し、勢いも失つた。彼女はこれといった成果も上げられずにひとり故郷へと戻つていつた。

それでも昨年。突然ベルコルから連絡があつたのだ。etcの文書を手に入れる計画を立てていると。初めは開いた口が塞がらないほどの衝撃と呆れがあつたが、結果的に彼女はベルコルに従う事にした。

脳内に浮かんだ、幼い頃の記憶が彼女をそうさせたのかもしれない。彼の行く末を、彼の目的を知りたかったがために。

ふつと彼女は白い息を吐く。冷え切つた廊下には鮮明に彼女の息遣いが浮かんだ。

—ベルコルはもういない。

数か月前の戦闘で行方不明になつたという。唯一生き残つたケラーでさえ、固く口を閉ざしてしまだ。急進派は終わつた。そう確信した彼女だったが、それでもここ日本を離れないのには理由があつた。

ベルコルとの最後の約束。

『ハイティントンを護衛しろ』

ベルコルが亡くなつた時点でこの契約を破棄しても良かつたのだが、彼女はしなかつた。何故か。彼女自身もわからないでいる。

「あれ？ 帰つたんじやなかつたの？」

男は再び顔を出した女に向かつて、からかうように視線を向けた。意地が悪いのか、彼女はつんとした表情でドアの前から一步も動かない。

「勘違いするな」

「ん？」

「お前を守るのはベルコルとの約束だからだ」

「はいはい。私は必要ないって言つているんだけどね」

「うるさい!!」

男——エドモン・ハイティントンは目の前の彼女の機嫌も知らず、柔軟な笑みを崩すことはなかった。

「ゴトー君。笑つた方がいいと言つただろう。同じパターンの繰り返しは私もつまらない。それに何より、せつかくの綺麗な顔が台無しだよ」

ゴトーはじとりと眉間のしわを深める。

「それよりどうしたんだ?外で待機していると思つていたけど」

周囲の本を片付けながら、何気なく訊ねるハイティントンだったが、返つてくる声はなかつた。

「うん。まあ話したくなればいいんだけど」

黙々と自身の作業を続けるハイティントン。そして思い出したように、彼は腕時計へと目をやつた。

「おや、もう十二時過ぎだ。そろそろお昼でも食べに行こうか」

「外は寒い」

着替えを取りに行こうとした彼の背中に、予想外の声が届いた。

「外は寒い。だから中に来た」

「ああ……そうだね、今の季節は寒いね」

一瞬戸惑いを見せたものの、彼はすぐにいつもの調子に戻った。

「うん、それなら今出るのはやめた方が良いかな。まだ身体が冷え切っているだろう」

瞬間、はつとなつてゴトーはその真っ赤な顔をあげた。ハイティントンはそんな彼女の様子を気にも留めず、ポットから二人分の小湯をコップに注いでいる。

「コーヒーは身体によくないから、ただのお湯になつちやうけど。緑茶も私はダメでね」

「ひどい待遇だな」

「君は私のボディーガード。客じゃなんんだろう?」

ニコニコと笑う男。きっと彼に口で敵うことはないのだろう。そう思つたゴトーは静かにコップに注がれたお湯を口にした。

「それで。ここに来た本当の目的は何だ?」

「目的?ああ、前に言わなかつたけ。私は彼を見に来ただけだよ。どんな立派な青年に成長したのか。まあついでにリニア・イベリンも見ておきたかったからな」

「リニア・イベリン?」

「ああ、今説明すると長くなる。それは後で話すよ」

するとそこで会話が途切れたのか、彼らは揃つてカップを傾けた。

「それにしてお付き合いを始めるとは思つてもみなかつたな」

「は?」

「四十五にもなつて二〇代の女性とお付き合い……長いこと生きていると色んな経験するもんだね」

ハイティントンは窓の外を眺めて小さく口元を緩める。

「お付き合いというのは訂正しろ。私はお前を守るために一緒にいるだけだ」

「世間ではそれを付き合っていると言うんだよ」

そういうつてハイティントンは大きな欠伸をする。

「私の推測が確かなら、彼はまだ自分の能力をわかつていない」

ふと、低い声色が部屋に響く。

ハイティントンはすっと目を細め、目の前の女性——いや、ゴトーを見た。

「ingだよ……可哀そうな奴」

「私の資料によると、金色の魔女と協力関係のようだが」

「ああ、だが自身がetcの保持者なのだと想像もしていないだろう。いや、むしろ彼らの周りがそれを必死に隠していたようだな」

「何故？」

ハイティントンは机をコツコツと叩きながら、ゴトーの問いに答えた。

「手に負えなくなるから。当時の彼は十六歳。自身のせいで世界各地で紛争が起こつたと考えてみる。普通の人間なら耐えられない」

「私は耐えられると思う」

「さすが鉄の女性と呼ばれるだけはある」

静かに笑う男に対し、ゴトーはやや口調を強めながら、

「他に隠す理由はないのか」

「……彼の周囲が彼を大切に思っているから。とか」

「……」

「大切な人が傷付くのは見たくない……そういう風に思ってくれる人間がもつと世界中でいてくれたらいいのにね」

何も言わないゴトーに対し、ハイティントンは静かに独り言を呟く。そして、エドモン・ハイティントンは、ゴトー・フリードリヒを見つめた。

「私の計画は、彼に自身の能力が一体どんなものかを教えるつもりだ」

「それに何の意味がある」

「いや、少々腹立たしくてね。周囲の人間が頑張つていると言うのに、当の本人は何も知らずに平凡と暮らしている。それにー、」

「それに？」

「彼ももう子供じやないんだ。眞実を知るのも悪くないだろう」

「……金色の魔女が制止する可能性は？」

「さあ。彼の命が脅かされない限り大丈夫だとは思いたいね」

そう言つてハイティントンは机の上にカップを置いた。

「どうだい？身体は温まつたかな」

「……別に」

ぶつきらぼうに答える彼女に向かい、彼は窘めるようにため息を零した。

「その口調どうにかした方がいいと思うよ。せつかくの綺麗な顔には似合わない」

「うるさいつ!!」

「あ……でも今のは割といいかも」

罰が悪そうに目を逸らす彼女を前に、ハイティントンは楽しげに笑う。

「ベルコルが一体何を考えて君を私の護衛にしたのかは知らないが……退屈はしないな」

「馬鹿にしているのか」

「まさか。君は面白いね、だから私は君が護衛についてくれて非常に満足しているよ」

ここで反論してもまたからかわれるだけだ。そう思ったゴトーは深くため息を零して、彼の言葉を無視する。するとハイティントンもそれ以上は何も言わなかつた。

「さて」

そして傍に掛けてあつたコートに腕を通すと、彼はゴトーヘと振り返る。

「行こうか」

「何か不満でも？」

狭い車内。ハンドルを握っているゴトーはちらりと隣に座る男の様子を窺つた。

「もう少し温度下げてもいいんじやないかな」

「このくらいが丁度いい」

きつぱりと告げる彼女に対し、男は諦めたように座席へ背中を預けた。

「……近いうちに何か行動を起こしたい。だが金色の魔女はもちろん、時宮葵やリニア・イ
ベリンがどのように動くかもわからない、君も協力してくれるね？」

「私はお前を守れと言われている」

「助かるよ、ありがとう。君を派遣してくれたベルコルも、思っていた以上に中々良い奴だ
つたんだな」

「……わかれればいい」

**

「リニア・イベリン」。彼女がこの名前にしてから五年、あるいは四年が過ぎた。正確な年数は彼女自身でさえ把握していない。それでも彼女はこの名前を気に行っていた。

以前の名前は非常に長かつた憶えがある。それ故、家の者は彼女を『ロミ』と呼んでいた。しかし、ロミという名前を彼女はあまり好きではなかった。それは彼女の幼少時代を象徴する名前であり、自身が家に縛られていた頃の記憶を必ず呼び起こすからである。

彼女の父親は子供に対し、あまり関心がなかつた。決して心を開くことはない。彼女はそんな父親を軽蔑していた。『余裕がない人』——自身を乳母やハンスに預けるほどに、彼は余裕がない人なのだろうと彼女は今でもずつと思つてゐる。

「……」

トイレの鏡に映る自身の顔をリニアはじつと眺めていた。

窓の外では微かに水滴が落ちる音がする。雨が降つて来たのだろう。

鏡に映る彼女の顔はどこか影が落ちている。普段の様子とはまるで正反対だ。鏡を見ると自身と正面から向き合わなければいけない。それは単に表面的な部分だけではなく、彼女にとつては自身の現在もそこに映し出されている様な気にさえなつてくるのだ。

「自分は一体何をしているのか。何のため、誰のために生きているのか。

「えいっ」

漠然と浮かぶ不安を打ち消すよう、リニアは両手で自身の頬を叩いた。

「笑顔!! 笑つていなきや!!」

彼女はにこりといつも通りの笑顔を映す。いや、映したつもりだつた。しかしその瞬間、その顔は先ほどの無表情に戻つていた。

この笑顔は偽物なのではないか。他人の前でだけ見せるためのものではないのか。本来の私の表情はこんなものではないのではないだろうか。

再び彼女の心中に広がる不安。

「それでも、」

周りも私と同じはずだ。他人の前では良い顔をする、笑顔でいる。それは悲しいことだが仕方がないことだ。当然の事のはずだ。

「しつかり。リニア・イベリン」

鏡の前の自身に向かつて、彼女は再び呼びかける。リニア・イベリン—イベリン。決して捨てるのことのなかつた名字。

彼女は気付いている。何故名字を捨てることができなかつたのか。

自身の子に関心を示さなかつた父親。きっとそれは彼女のトラウマとして今も心中に植えつけられているのだろう。彼女は自身を見てもらいたかった。家を出て、魔法士になつた。それでも父親は彼女を視界に入れることはない。彼女は今でも思つている。

——本当に最後まで余裕のない人。

「ふあああ」

思わず零れる欠伸。俺は睡魔に抗うように顔を上げる。図書室前の渡り廊下で俺はぼんやりと校舎裏を眺めていた。

「……結局、あの男は何者なんだ」

先ほどの研究室前での一件。彼は何故、金色の魔女という名を知っていたのか。疑問ばかり浮かぶが、どうやら俺の脳はだいぶ疲れているらしい。まるで脳が強制的に瞼を閉じさせようとしている気さえ…、

「みーつけた!!」

突然響いた声に、ぱっと俺は目を開いた。振り返ると、そこにいたのはリニアだった。

「お前……やつと起きたのか」

「『めん』めん」

彼女は悪びれた様子を一切見せず、いつものように笑っている。普段なら小言のひとつでも言つてやる所だが、実際のところわざわざ起きて、彼女が大学まで来た事に俺も驚いていた。

「何してるの？聰太」

「別に」

俺は大きく伸びをする。そして何となく落ちていた石ころを拾うと、壁に無かつて投げた。

「壁に八つ当たり？何かあつたの？」

「何もない」

素つ気なく答えたはずなのに、彼女はニコニコと笑いながら俺の隣に腰を下ろした。そして当たり前のように腕に手を絡ませてくる。

「離れる」

「え!!この程度のスキンシップならいいじやない!!」

「重い」

「……余裕のない人」

「はあ？」

ふと、彼女の口から洩れた言葉。思わず聞き返すと、リニアははつと我に帰った様な顔で首を横に振った。

「何でもない、何でもない!!」

「……」

しばらく俺たちは会話をすることなく周囲を眺めていた。

長期休暇期間、滅多な事では学生も学校に来ることはない。彼らには皆、理由があつて今日ここにきているのだろう。

一目的。理由。

「あー……ただでさえ、頭ん中ぐるぐるしてるので余計なことを」

傍にリニアが居ることも忘れ、ふと口をついて出てきた言葉に彼女はいち早く反応する。

「何？悩みがあるんだつたら、このお姉さんに全部言っちゃいな !!」

自身たつぱりな顔で胸を張るリニア。彼女を見ているとー、

「お前さ」

「ん？」

「どうして魔法士になつたの？」

唐突な質問に彼女も、俺自身も当惑した。

「えつと……ど、どうしてなつたんだろうね」

空笑いをして頬を搔くりニア。まずい質問だつたのかもしれない。そう思つた頃には、もう彼女のなかでは決心がついたのか、リニアはゆっくりと口を開いた。

「私の家はね、すごい金持ちで私は何不自由ない生活を過ごしていたの。でもね、そんな表面的に裕福でも私の心はいつもさみしかつた。周囲の人間との会話、親とさえ満足に会話をすることもない。したとしても、そこにはいつも礼儀や気品を求められる堅苦しい世界」リニアの顔はいつになく真剣だ。そしてとても辛そうである。

「聰太？」

思わず俺は立ちあがつていた。

「話したくないなら、無理に言わなくていい。辛い話ならしなくてもいい」

「あ、私そんなに怖い顔してた？」

「別に俺もそこまで知りたいわけじゃないし……仲のいい関係でも秘密の一つや二つあるものだろ。だから無理して言う必要はないってこと」

すると先ほどまでぎこちなく笑っていたリニアは、ふつと優しげに微笑み、

「ごめんね」

「……いや、俺の方こそ。なんかごめん」

俺は彼女の顔を見れずにいた。じつと、降り出した雨を眺めている。

「うん……いつかちゃんと話すよ。誰かに聞いてもらいたいからさ」

ちらりとリニアの顔を横目で伺うと彼女はどこか遠い景色を眺めているようで――。

「なら、その時を俺も待ってるよ」

「うん」

にこりと笑う横顔は、やつといつも通りのものへと戻っていた。

そして彼女は勢いよく立ちあがる。

「おいしい!!」

リニアは学食の飯を前に、満足げな様子で口元を緩めていた。

「まさか飯を食うために学校に来たんじゃないだろうな」

「そんなまさかー!!まあ、学食を食べてみたかったのは確かだけど

そう言つてリニアは味噌汁のお椀を手に取る。どうやら半分はこれが目当てだつたに違いない。確かに俺もこここの学食の味は悪くないと思つている。

「ところで、大学生活は楽しい?」

茶碗を手にしたまま、唐突にリニアは口を開いた。

「……米粒ついてるぞ」

「え!?

慌てて口元を拭うリニア。面白いものが見れた。

「大学生活?まあまあだろ」

「疲れない?勉強と就活もあるし」

「別に。それはみんな同じだろ」

「そりやそりや」

「それに三年前に比べたら全然マシだ」

「…………そうだね」

ふと、彼女は箸を握っていた手を止めた。俺はそんな顔をさせるつもりはなかつたのだが。

「俺はある事件で生き残れてよかつたと思つてゐる。まあ三年も過ぎたせいもあるから、こんな事言えるんだろうけど……今更死んだ人間捕まえて泣き叫ぶには時間が経ち過ぎた。俺は今を精いつけば生きて行くしかないと思つてゐる」

「…………そう」

暗い雰囲気を崩せたと思つていたが、リニアの表情が晴れることはなかつた。

そして消え入るように小さく零す。

「私が死んでも聰太は今と同じ風に思うのかな」

「ど、どういう意味だよ」

「ううん。ただちよつと寂しいなつて思つて」

「むつ……言い方が悪かつたか。別に俺は犠牲にならなくてよかつたつて言いたいわけじやない!! そ�じやなくして……俺が言いたいのは過去があつての今だから、過去の出来事を生かしたいだけだ。今だつて仲間が危険になつたら、俺は絶対に助けに行く。絶対にもう犠牲は出さないつて決めてるんだ」

気づくと、リニアはぽかんと口を開けて俺を見ていた。

「……なんだよ」

「ううん、いつも通りの聰太に戻つて安心した」

「……意味が解らん」

妙に照れくさくなつた俺は、リニアを置いてそそくさと食器を片づけにいく。後ろで何か叫んでいるが、今は聞かなかつた事にしよう。

「etcは何故etcと呼ばれるのか」

車の壁を叩きながら、男は女に問いかける。

彼女は何も答えない。しかし男は別段、機嫌を悪くするじみなく自身で答えを口にした。

「一般的には金色の魔女が魔法を学問化した後、残りの能力を全部ひつくるためにetcと呼んだ。これが語源だ。etc、つまり『その他』。思うに、彼女は文字と関連したetcを学問化しそれを主に使用するものとした。だが多くのetcは未だ散在している」

「何が言いたい」

男の言い分に、思わず女は聞き返した。

「つまりetc」のことは我々が考へてゐる以上にとんでもないものだというのだ。それこそ物理法則を完全に超越した、奇跡のようなものがほとんどだ。おそらく金色の魔女はそれを体系化するのはまずいと本能的に悟つたのだろう。誰もが扱える魔法にしてはいけないもの。あえて『メインから外した端のもの』——それを『その他』というじみにしたのかもしれない。『その他』が『メイン』になつてしまつたら、この世は本当に滅亡するだろうな」

そう言つて男は大きく伸びをした。と同時に女は車を止めて、シートベルトをはずす。

「さてと、午後の仕事も頑張りますか」

そう言つて男は車のドアを開ける。それに従うように女も手袋をはめて外に出た。

幼稚園に戻ると、何故か俺は掃除をしていた。何度も言うが、俺は一人暮らしをしている身であり、自分で言うのも何だが、料理に洗濯と、これでも結構この場所には食事程度の貢献はしている方だと思つてゐる。

「なのに、何でお前は働かないんだ!!」

「二人でやるより一人でやつた方が気楽かなつて思つて」

だめだ、この女と話していると余計に疲れる気がする。俺はリニアを無視して、ひたすら手を動かす事に集中した。いや、本当は頭の中は全く集中できていない。昼間の出来事をどん

なふうに話せばいいか、それだけで頭がいっぱいだつた。

昼間あつた出来事を全て話していいのか。リニアの性格なら、すぐさま大学に引き返してあの教授の胸元をつかみ上げるかもしれない。それはまずい。金色の魔女という噂を聞いたことがある、ただの一般人かもしれない。研究所も協会も何一つ知らない可能性だつてあるのだ。

「そういえば、どんな授業だつたの？」

「え？」

彼女は何てことはない、ただの世間話のような調子で声をかけてきた。俺もすぐに返事をしようと思つたが、

「聰太？」

「あ……えつと、何て言えばいいのか。普通の授業だつたよ」

「面白い授業じやなかつたの？」

奇妙な間があつたせいか、リニアは不思議な顔で首を傾けた。

「普通だよ、これといつて変わったところもない」

「へえ」

「まあ別につまらなかつたわけでもないけど」

「で、どんな授業だつたの？」

リニアはいつも通り好奇心の塊のような瞳で俺へと詰め寄る。俺は逃げるようにな別の部屋の掃除へと移動しながら、彼女の質問に答えた。

「……コミュニケーションに関する授業」

「コミュニケーション……あそこの箪笥に私の下着入つてるよ。見てもいいけど」

嬉々として部屋の奥を指さすリニア。もちろん俺はこれに関しては無視する意向を示した。

「コミュニケーションの授業つていつても、そんな難しいわけでもなかつたけど。一般知識をより分かりやすく噛み碎いた感じだつたな。意思疎通は相手が理解しないと意味がないとかなんとか」

「へえ……ちゃんと聞いてるじやん。偉い偉い!!」

リニアは俺のすぐ横で盛大な拍手をする。これは馬鹿にされているのだろうか。はたまた俺が筆箋の件を無視したせいだろうか。

俺はおさるの人形のようにやかましく手を叩く女を避け、部屋の隅にたまつた埃を拭き取りに行こうとした。しかし、

「……邪魔」

これ見よがしに俺の目の前に立ちふさがる女。ニヤニヤと笑っているのが余計に腹立つ。

「退けよ」

「退かなかつたらどうする?」

「この部屋の掃除はここまでだ」

そう言つて俺はすつとりニアに背中を向けた。

「いやいや、ちょっと待つて!!」

「悪いが俺は洗濯をしなきやいけないんだ」

「いやだー!! 退くから!! もう邪魔しないから!! 掃除してー!!」

リニアは俺の服の裾を引っ張つて、必死に俺を引きとめる。もちろん俺は彼女の力に敵うわけがなかった。

＊＊

部屋の掃除を終え、次は洗濯物。本当に主夫さながらの行動を送っている。

「……やつぱりもう一度会つて、カマかけてみるか」

ぼんやりと洗濯物を干していると、思わず俺は独り言を口に出してしまった。

「カマ?」

いつのまにか俺の背後にいたリニアは当然のように疑問符を浮かべる。

「お前……向こうにいたんじゃないのかよ」

「誰にカマをかけるの？」

「別に。お前に言つても仕方ないだろうけど」

「けど？」

独り言を聞かれてしまつた以上、素直に白状した方がいいか。両手を上げて詰め寄つてくるリニアを見て、数秒で俺は口を開いた。

「エドモン・ハイティントン。今日受けた講義の先生にちょっと聞きたい事があるだけだ」

「カマをかけて？」

「そう」

「それで？何を隠してるの？」

「別に何も隠してないけど」

洗いざらい吐かせるつもりか、リニアは依然として俺に接近し続けた。

「絶対に何かある!! 聰太、隠し事している時いつもと違うから!! 私にはわかるの!!」

「そんな根拠も無いくせに……」

「ある！ 聰太のことは、他の誰よりわかっているつもりだもん!!」

真つすぐな目でそんな風に言われるとは思っていなかつた。それに彼女が本気なのに、このまま適当にはぐらかすのはどうにも心地が悪い。それでも……、

「……本当に隠し事はないよ」

「本当に？」

「本当に……つ?!」

突然俺の視界が暗闇に囚われた。そして微かに感じる彼女の匂いと、体温。すぐに俺は何をされているのか悟つた。何より顔面に感じるこの柔らかい感触は……、

「聰太!! 本当のこと言つて!!」

「本当に……つだつて……言つてるだろ!!」

「嘘ついてる!!」

「おいつ!!……離せ……くるしつ……!!」

必死に彼女の胸元でもがく俺。端から見たら相当間抜けな絵面だろう。

「本当に何もなかつたの!?」

「本当……本当だつて……!!」

やばい——これは本当に息ができな——。

「あ」

俺の抵抗が弱まつたせいだろうか、リニアも思い出したように腕の力を解いた。

「……死ぬかと思つた」

「聰太が本当の事言わないから」

彼女も少し罰が悪いのか、拗ねたように口を尖らせてそっぽを向いていた。

「最初から何もなかつたつて言つてるだろ。普通に授業受けて帰ってきただけだ」

「……」

「それよりお前!! 邪魔したんだから、後の洗濯物代わりに干しとけよ!!」

「もう」

リニアは不満げな顔をしていたが、仕方がない。ここで俺が下手に出てやる必要も全くなかった。俺は振り返ることなく、部屋の中へと戻った。するといつのまに帰つて来ていたのだろうか、奏がじつと俺の方を見つめていた。

「よお、奏。おかえり。そんな所で何してんのだ?」

「見てた」

「見てた? 何を?」

「ベランダ」

「ベランダ……」

さつきの瀕死体験をか。

「見てたんなら助けてくれよ。本当にあれは殺されるかと思った」

「……」

奏は何も言わず、どこか憐れみを込めたような視線で俺を見ていた。何故か俺の心も辛くなつてくる。

「……それじゃ、奏。俺ちょっと外出てくるわ」

「うん」

そう答えてくれた奏の声には、やはりどこか憐れみが籠つているように聞こえた。

鈴木を怒らせてしまい、一人黙々と洗濯物を干していたリニア。彼女の傍に、奏は音もなく近づいていた。そしてじつと、彼女に視線を送り続ける。

「あれ？ 奏。 いつのまに帰つてたの？」

「さつき」

「え、 全然気付かなかつた!!」

「聰太も気づいてなかつた」

「聰太とすれ違つた!?」

男の名を聞くや否や、リニアはさつと奏へと顔を向けた。

「あ、あの……奏さん。彼、何か言つてましたか？」

彼女は恐る恐る男の機嫌を伺いたいようだ。奏もその意図を汲んでいるのだろう。

「……」

「何で黙つてるの!?」

「……殺されるかと思つたつて」

ぽつりとありのままを証言する奏。それに対し、リニアの顔は徐々に険しいものへと変わつ

ていく。

「あれは愛の抱擁に決まつてゐるでしょ !!」

「本人はだいぶ辛そうだったけど」

「愛つていうのはね、苦しみを伴いながら成長するものなの」

「……」

ひとりで陶酔するように頬を染めるリニア。そんな彼女に何を言う事もなく、奏は淡々とした表情で一部始終を見ていた。

「奏ちゃん？ 帰つて来てるの？」

突然奥の部屋から、スリッパを引きずる音を立てながら魔女——天城紫乃が顔を出した。

「ふたりとも、そんなところで何してるの」

「愛について」

「愛は辛いもののらしい」

全く要領の掴めない二人の解答に、思わず天城も顔をしかめる。そしてつい先ほど、玄関で
すれ違った青年を思い出した。

「そういえばあの子、咳込んでいたけど……風邪でも引いたのかしら」

「あ……あはは、たぶん大丈夫かと」

苦笑いをして明後日の方向を向くりニア。非常にわかりやすい。天城は彼女が何かしでかし
たのだろうと推測した。

「そういえば」

天城は一呼吸置いてから静かに奏へと顔を向けた。

「あの子、何か言つてた？」

「……リニアに殺されかけたつて」

「う、誤解!!」

冷静な声音で答える奏と、慌てふためくリニア。いつも彼女なら微笑ましげにその光景を
眺めているが今日は違つた。

「リニアは？あの子から何か聞いてない？」

唐突に話を振られたりニアは、一瞬戸惑いを見せるも今日の出来事を淡々と述べていった。

「これといって特別な話はないけど……強いて言うなら、聰太、今日は冬期講習に行つてしま

した。本当は私も行く予定だつたんですけど、二日酔いでして」

小さく舌を出しておどけるリニア。それでも天城は真剣な表情を崩さなかつた。

「彼、何の講義に出たの？」

「忘れました」

「だと思つた。さすが私の弟子ね」

「いたつ」

天城はリニアの頭を軽く小突いた。顔は笑つてゐるが、心中穏やかでないのは明らかだつた。

「あ、でもでも。講師の名前は覚えてます」

「あらほんと？」

「たしか……エドモン。エドモン・ハイティントンって」

「エドモン・ハイティントン……」

その名を聞くと、すぐに彼女は先ほどの険しい顔へと戻った。

「先生、知つてるんですか？」

「ええ……そうね」

「そんなに有名な講師だったんだ」

驚いた表情を浮かべるリニア。彼女の前で天城は盛大なため息をついた。しかしこれは、彼女の無知故に零したものではない。

「それで？その男の講義を受けてきたつて？」

「そう言つてました」

「あいつ……一体どういうつもりで……」

一気に疲れがやつてきたのか、そんな様子を見せる天城に、ついリニアも聞き返す。彼女は

隠す事もなくリニアに答えた。

「エドモン・ハイティントン。おそらく私が知る中では、世界中で最も顔が広い男と言つても過言ではないだろう。急進派にも穏健派にも属さない、いわば研究所の仲裁役とでも言うべき存在。協会が捕えようにも、上手い口実が見つからない、面倒臭い男よ」

研究所の名を聞き、思わずリニアも目を丸くする。

「同姓同名という可能性は……」

「だといいけど。その講義、コミュニケーションはどうとかつてやつじやなかつた？」

「あ」

リニアの反応で魔女の推測は確信へと変わった。彼女はすぐさま何か事が起こった時のための対策を頭で考え始め、ふと、先ほどの青年の動きを思い出す。

「彼はどこに行つたの」

「外に行つてくるつて」

奏はほんの少し不安げな顔で魔女を見上げた。彼女の表情は未だに強張っている。

「彼が一体どういう考え方あの子に近づいたかはわからないけど……彼も研究所の一員、何を仕出かすかわからないわね」

「私行つてきます」

リニアは急いで玄関へと向かうが、その手を魔女が掴んだ。

「待ちなさい。考えなしに飛び出しても時間の無駄だ」

「でも……」

「しつかりと対策を練つてからにしなさい」

「そんなことしてらうちに聰太の身に何かあつたらどうするんですか」

リニアは魔女の制止も聞かずに、再び玄関へと走り出した。そんな弟子の背中を見送ると、魔女は深いため息と共に大きく頭を頃垂れた。

「どんな時も冷静について……ハンスの指導がなつていなか。それとも、あの子のためなら走り出すのも無理ないってことかしら」

魔女は顔を上げる。そこには仕方がないと、まるで我が子を見守るかのような顔があつた。

「さてと。大丈夫よ、奏ちゃん。今回はリニアに任せましょ」

「……はい」

奏の声色からは明らかに恐怖が伺える。すると魔女は、彼女と同じ視線になるまでしゃがみ、そつと頭の上に手を乗せた。

「今回の相手はそこまで暴力的じやないから。鈴木君もきつと無事よ。あの男が接触してきた理由も何となくわかつてきたし……あの子に真実を告げてしまふかもしれないわね」

「……」

奏は何も言わずに鈴木、そしてリニアが去つていった玄関を見つめる。

「リニアはね、表面的には明るくやつてるけど実際の所、非常に不安定。だからきつとあの子は鈴木くんに惹かれているのよ」

「……」

「奏ちゃんもそろそろ本気出さないと奪われちゃうかもよ？」

魔女がこそりと奏に耳打ちすると、彼女の顔は一瞬でゆでダコのように真っ赤になつてしま

つた。

「私は別に……そんなんじやない」

「冗談よ、冗談」

魔女は楽しげに笑うと、ゆっくりと腰を上げた。

「さてと。万が一のために私も準備しつくか」

彼女は大きく伸びをすると、つい先ほどリニアが閉めたばかりの窓を開ける。冷たい冷気が一気に室内へと入りこんできた。

「そろそろ真実を知るのもいいかもしない、成長した今ならきつと君も大丈夫だ」

そう言つて魔女は、冬空の下に見える街並みに向かい、穏やかな笑みを浮かべた。

「やあ、いらっしゃい」

「……」

俺は部屋の真ん中で腰掛けている男——ハイティントンをじつと凝視した。彼も俺からの視線を逃れる事なくじつと見つめ返す。口元には穏やかな笑みを浮かべており、俺が睨みつけているはずなのに、何故か彼からの威圧感を凄まじく感じた。

「お茶でも飲むかい？」

俺は何も答えなかつた。すると彼は小さくため息を零して、椅子から立ち上がりるとカツプを取り出した。そして食器棚からお茶のパックを出し、慣れた手つきでお湯を注ぐ。カツプに注がれるお湯の音のみがこの空間に響いていた。

「別に何も入れてないから安心していいよ」

そう言つて男は、これ見よがしにカツプに口をつける。俺は目の前に置かれたお茶をちらりと見た後、すぐに男へと視線を戻した。

「何か言いたいことがあるんだろう？いや、聞きに来たというべきか」

「……先ほどの話ですが」

「先ほど……君がここに来た時かな。何の話だっけ」

ハイティントンはふざけているのか、あるいは俺を試しているのか。必死に思い出すようにな首を傾げた。

「金色の魔女」

この言葉だけで充分だった。男はすぐにぴんと来たかのような顔をして、首を縦に振る。「あなたは先ほど金色の魔女について聞きましたよね。彼女は最近どうしているのかと」

「うん、聞いたね。別に深い意味はなかつたんだけど。ただ元気にしているのかなつて位で」「俺が聞きたいのはそうじやなくて、金色の魔女と言う名前です。どうしてその名前を知っているんですか。いや、あなたは何者ですか？」

俺の質問に男は非常に落ち着いた様子で再びお茶を口にした。

「その前に、あなたつていうのはおかしいじやないか。礼儀がなつてないよ。そうか……一応自己紹介しておこう」

「エドモン・ハイティントン。教授じやないですか？」

「ああ、間違つてないよ。それは私の本業だ」

「本業？」

男は俺に向かつて二コリと笑いかけた。そして――、

「私の職業は研究者。というのは間違いではない。けれど調律師でもあるんだ。人と人の関係をいいように保つ役割とでも言えればいいかな。もちろんetc.だと非科学的なものを用いてじやない。ちゃんとしたコミュニケーションを実践した上でだよ」

調律師？

思わず俺は眉をひそめた。ハイティントンは俺の理解が追いついていないと察したのだろう。すると、彼は決定打とも言える単語を口にした。

「私は研究所の人間だよ。もちろん君が知っている方のね」

「な……つ!! やっぱり研究所の人間か!!」

すかさず俺は懐に手を突っ込んだ。万が一に備えて、あらかじめ用意しておいたペンと数枚の紙がそこには入っている。防御くらいは出来るはずだ。

俺は男の手、腕、足、全ての動きに注視して少しづつ距離を取っていく。

「そんなに警戒しなくても大丈夫だよ。私は彼らとは違つて全く戦闘力がないから」

そう言つて、男は再びお茶を飲む。

「うーん……やっぱりこの味は私には合わないな」

本当はただの一般人ではないか。そう思うほどに彼らは殺氣一戦おうと言う気が感じられず、俺も腕に込めていた力を緩めた。

「さて。私の用事は大したことじやないんだ」

「研究所の人間が大学に用なんであるのか」

「いや、用があつたのは君にだよ。鈴木聰太くん」

「俺……？」

再び俺は警戒態勢へと入る。そんな俺を見てか、ハイティントンは呆れたようにため息を零した。

「だから、私は別に君に危害を加えようと言う気はないんだ。落ち着いてくれ」
男は窘めるように俺へと視線を向ける。そして静かに口を開いた。

「三年前」

その言葉に思わず俺は反応する。しかし男は構わぬ続けた。

「三年前、ヨーロッパと言う事件……戦争があつた。協会と研究所が数百年ぶりに衝突した大規模な争いだ。この事件の結果、この二つの間は未だに冷戦状態であり、更にもう一つの勢力の台等、三つの勢力関係が生まれた。当事者の君はよく知っているだろう」

「……ああ。あなたも参加していたのか」

「そうだよ、私は研究所を戦争に駆り立てたと言つても過言ではないかな」

その言葉を聞き、俺は知らずと握りしめた拳に力が入つていた。

「まあまあ、落ち着きなさい。過去の話だよ。それに駆り立てたと言つても、あれほど大きな争いになるとは思つていなかつた」

「……それであなたの用件は何ですか」

「用件？だから言つたじやないか。君だよ。君に会つてみたかつたんだ」

男の言いたい事が全くわからない。

かつての敵の一人を見ておきたいと言う事だろうか。しかし、実際に前線に立っていたのはどちらかというと俺ではなく葵だ。俺は戦つていたというよりは戦うための訓練の方が多かつた覚えがある。

「ふむ……どうやらその顔は全く知らないようだね」

「知らない？何をだ」

「君は何も知らずに戦争に参加していたのか？」

妙に男の言い方が腹に立つ。彼の方が多くの情報を持つているせいだろうか。

それとも――、

「俺は教えてもらえないのならない。きっと悪い内容だろうからな。俺は何も知らないといふ事に不満はない」

「……不満はない。か」

「……ただあの戦いが長引けば、何かもつとひどいことが起こりそうな気がした。それだけでも充分戦う理由にはなるだろ」

「真実を知らなくても？」

ハイティントンは何度も問い合わせるように俺を見据える。

「教えてくれる人がいなかつた。それに隠していることを無理に言わせるつもりもなかつた」「その真実が非常に重要なものだというのにも関わらず、君は見ないふりをしたんじやないか？」

「……その何が悪い。知らない方がいいこともあるだろ」

「どうも私には、君がただの現実逃避をしたがっているようにしか見えないな」

「違う!!」

男の言葉に思わず俺は声を荒げた。

「俺は現実逃避なんかしていない!!」

「いや、したよ」

「……ふざけるな。目の前で戦いが起こつた。それに対処するのに俺は精一杯だつた。そんな状態で本当のことだとかを聞いてる余裕があると思うのか!? 何も知らないくせに知った様なことを言うな!!」

「……そうだな」

男には俺の勢いに気圧された様子がまるでなかつた。彼は小さく笑みを零し、

「結局、君は断片的な情報を頼りに、それを正しいと判断し戦つていた。うん、全てを知らないと言うのは後々、あの戦争による後遺症も少ないだろう。それもいいかもしないね」
——戦争。ああ、そうだ。あれは確かに戦争だつた。犯人を捕まえるだけの探偵ごっこでもない。俺はそれを痛いほどわかつてている。そのつもりだつた。

「それでも君は真実を聞くことはなかつた」

「そうだ」

「聞きたくなかったのだろう?」

俺は鋭く目の前の男を睨んだ。

「悪かった、私も君を怒らせるつもりはないんだ。落ち着いてくれ」

「俺をからかっているのか」

「そのつもりはないけど……悪戯が好きだという点は否定しないね」

ハイティントンは依然として飄々とした態度を続けている。

「当時の君は高校生だったね。まだまだ不安定な子供だ。そんな君に真実を告げるのはまずいと判断したのだろうな」

「いい加減、さつさと用件を言つたらどうだ」

「君はもう子供じやない。責任を負わなければいけない……そう、君は私の授業をかなり眞面目に聞いていたようだつたね。けど一見して、私には余裕がないように見えた。日々を大切にし過ぎて、現在よりも過ぎ去つていく時間に追われているようだ」

不愉快だ。

初めて会つた人間に自分を評価されるのを黙つて聞いていられるわけがなかつた。

「残念んですけど、俺はそんな性格じゃないですね」

「本当かい？少なからず当たっているところがあると思うんだけど……余裕がなき過ぎて現実というものに執着するタイプ。分かりやすく言うとね、君は三年前に非常に多くの非常識なことを経験してきた。だからこそ、そんな過去とは正反対の現在を、現実を必死に過ごしているようだと言いたいんだよ」

「……」

俺は何も言わずに男の意見を聞いていた。

「別にそれを悪く言うつもりはない。賢明な判断だと思う。しかし、どうも私はそれが気に入らない。戦争を経験しておきながら、何も知らないと言つて臭いものに蓋をするように現実を生きると言うのはおかしくないか？」

厳しい口調とは裏腹に彼の顔には未だ笑顔が張り付いている。そして、

「これでも私は結構心が狭くてね」

そう言つて男は立ち上ると窓を開けた。冷たい北風と部屋にかかる暖房の風が混ざり合ひ、妙に気持ち悪い。

「ing……自身の運命を開拓する能力として知られている」

「それは俺も聞いた事がある」

その言葉に、彼は驚いて俺へと振り返った。

「誰に聞いたんだ？」

「怠惰のロベルト」

「ははは!!あのロベルトがそんなことを教えたのか!!私以外にも気に入らなかつた奴がいたとは……しかし、あのロベルトとはね」

男は大きく笑い声を上げると、再び俺の顔を見据えた。

「ingがどういった能力かは聞いているのか?」

「いや、詳しくは知らない」

「そうか、彼も中途半端に教えたものだな」

そう言つて、彼は講義をしているかのような口調で説明を始めた。

「ing。それはetcの中でも非常に特異な能力だ。自身で運命を開拓すると言う事は、自身で自身の未来を決定できると言う事だ。これはあらゆる場面で応用ができる。それ故にあのingショックという事件は起きた」

俺は黙つて彼の説明を聞いていた。男も大して俺の反応を待つている様子でもない。

「etcは保有している人間が亡くなれば、違う人間にその能力が移る。それはまだ覚醒をしていなかつた人物、且つ亡くなつた人間と同じような性格、心の在り方をしている人間だとされている。まあこれは我々研究所が発見したものだから、そうだという確証は未だ得られないのだがね」

「……それがあなたの言いたかった本当のこじこじやつですか？」

「いや、これにはまだ続きがある。このingという能力が三年前、ここ日本で君が住んでいるこの地域で発見された」

「こじこじで……？」

「それはつまり、

「研究所はing保有者を探した。元々この地には既に一人のetc保有者が観測されていたが」

「やめてくれ。

「もう君もわかつているのだろう」

「黙れ!!」

「ingを保有していたのは君だ、鈴木聰太くん。ingショックは君のための舞台だつたんだ」

「はあ……は……」

物凄い勢いで大学構内に駆け込む女性。タクシーやバスなどといった他の移動手段が思いつく暇がないほど、彼女の心には余裕がなかつた。

「聰太……どこにいるんだろ……」

リニアは荒い呼吸を整えながら、ざつと構内を見回す。思い至つたのは先ほど講義があつた

教室だ。リニアは次の瞬間にはもう走り出していた。

「どうか無事でいて……!!」

彼女の頭に浮かぶのは一人の男の顔だった。彼は何も知らない。何も知らないからこそ、日々を平和に過ごす事が出来たのだ。こんな唐突に真実を聞かされてしまつたら彼の心は壊れてしまうかもしない。

リニアの不安は次第に広がっていく。と同時に彼女の心中では怒りが沸き上がっていた。

「あのバカ……何もなかつたとか言つておきながら……後で覚悟しちきなさい……!!」

「随分と威勢が良いな」

突如リニアの耳に冷たい声が流れた。

「誰？」

リニアの前で立ちふさがる女。どうやら声の主は彼女のようだ。

「私はゴトードリードリヒ」

抑揚のない声音で名乗る女をリニアは鋭い視線で見据えた。

「何の用？今遊んでいる暇ないんだけど」

「この先に行かせるつもりはない」

「二度も言わせないで。遊んでる暇はないって言つてるの。それとも聰太の居場所でも教えてくれるのかしら？」

「鈴木聰太の居場所は知つている。四階の研究室だ」

「そう、それは有り難いわね」

言い終わるや否や、リニアは急速に女との間合いを一気に詰めた。

「……」「

俺は何も言えず、黙つて床を見つめていた。いや実際は見てなどいない。状況の理解、整理で頭の中がパンクしそうだ。ハイティントンは何やらペンを走らせていくようだつた。きつとこれも彼の実験の一種なのかもしれない。

だが、今はそんなことどうでも良かつた。何より、体中が強張つていて自身の身体の認識さえおぼろげだ。

「鈴木聰太くん。何か言う事は?」

俺は何も言わない。顔すら上げられない。

「あれは君のせいで起こつた戦争だつた

耐える。

「君のせいでたくさんの人気が傷付いた

大丈夫だ。

「何も言い返さないのかい?」

今の俺なら。

俺は必死に呼吸を整えた。そして、真っすぐと目の前の男の顔を見つめる。

「原因は俺だったのか」

「驚かないのか？」

「充分驚いている……本当だ」

「それにしては幾分冷静に見えるが」

ああ、そうだ。大丈夫、俺は冷静だ。

「あなたは『コミュニケーションは自身と相手の言葉が相互に理解されたときのみ成立する』
と言いましたよね」

「ああ」

「なら、俺はあなたの言葉を理解したくない」

「ははっ。それはもうストレートに話したくないということじゃないか」

口元に手を当てて笑う男を、俺は依然として見つめる。

「あれから三年が経つた」

「もう三年だ」

「俺にとつてはそれがとても長かつた。奏が話せるようになつて、葵が前向きに生きれるようになつて、俺も普通の人生を歩めるようになつた」

「それは良かつたね」

「ああ、そうだ。あなたにとつては短い期間だつたかもしれないけど、俺にとつてはとても長くて大切な三年間だつた。だから俺は大丈夫だ。あなたから真実を告げられても、俺は狂わずにはいられる」

「ほう」

「時間が一、この三年間が俺の心を癒してくれた」

そう言い切ると、男は冷たい視線を俺に向けてきた。

「それでも過去が消えたことにはならないよ」

「わかっている。過去は消えない。だが、当時の俺は何も理解していなかつた。etcを保有

している事実さえ知らなかつた。悪いが、俺には全く罪悪感がない」

「責任転嫁か」

「それはこつちの台詞だ。俺も巻き込まれた側だ」

男は黙つて俺を見据えていた。そして、ため息をつくと、

「……君が再び我々の標的にされたのは、まだ充分に利用価値が残されていたからだよ。君の能力、ingは君が生きている限り、いつでも発動する事が出来る」

「それならいつでも発動を止めてくれて構わない」

「数ヶ月前の話だ」

唐突に男は俺から視線を逸らし、部屋の隅を眺めながらぼつりと語り出した。

「金色の魔女の頼みで小学校に出向いたことがあつただろう。そしてそこから君は瞬く間に非日常の世界に染まつていった。そう、あれがきっかけだ。ベルコルは君が再びetcを発動できるよう機会を与えていた。しかし君は発動していない、出来ないんだ」

「え? うう」とだ

「etcを発動できなかつた理由。それは君が現実を認めていないからだ」

男の言い分に思わず俺は笑みを零してしまつた。

「俺が？現実を認めてない？そんなわけないでしょ？」

「ああ、すまない。私が言つた現実とは今、現在のことじやない。君が経験した全てを入れての現実だ。実際に経験したにも関わらず君は非日常を嫌い、否定する」

当たり前だ。この男は何が言いたい。

「君自身、無意識に三年前の事件から目を逸らしている。言うなれば、あの事件の外観、外枠だけを見ている様なものだ。直視したら、そこに引き込まれてしまふ事を君はわかつてい る。だから君は現在に執着するんだ。過去に引っ張られないためにね」

「……」

「そんな君に再び非日常を与える、そして君がそれを認めた瞬間、君のetcは発動する。これがベルコルの書いたシナリオだつた」

俺は何も言い返すことなく、じつと奥歯を噛みしめていた。

「ああ、そこまで警戒しなくてもいいよ。私は君が真実を知った時、どんな反応をするか見
たかつただけだから」

「満足したのか」

「いや、正反対の結果だ。君も成長したということか」

ハイティントンは残念そうにため息を零す。そんな彼を俺は嘲るように笑つた。

「ああ、そうだ。俺も過去に目を向けるより差し迫る現実を見ている。俺にとつてはetcや
らingなんかより学費と家賃滞納の方が恐ろしいね」

「他人の事は知らずか」

「俺の人権も保障してもらいたいですね」

そう言つて俺たちは無言で対峙した。正直、俺にとつては本当に現実味のない話だった。だ

から俺は、今の俺は、こうも自分を保つていられるのだ。

ドンツドンツ

唐突に俺の背後から大きな音が聞こえた。

「くそつ、何だこの扉……！」

扉の向こうで誰かが必死に開けようとしているようだ。それを見て、ハイティントンは呼びかけるように扉に向けて声をあげた。

「ああ、その扉。ちょっと小細工をしててね、簡単には開けられないよ」

「なつ……このつ !! 開けろ !!」

必死に叫ぶ声。どこかで聞き覚えのある女の声だった。

すると、次の瞬間。派手な音を立てて扉が前方に倒れてきた。床に溜まつた埃を踏みつけて入つてくる女——それはリニアだった。

「お前 !! 何でこんなところに……つて、おい !!」

俺の言葉を最後まで聞くことなく、彼女は俺の腕を取つて走り出した。

「あーあー、何でことしてくれるんだか」

ハイティントンは壊れた扉を見下ろして、深いため息を零した。

「ゴトー君に足止めを頼んでいたはずなんだけど。ダメだつたか」

「誰がダメだつたと?」

「おや? 戻つてたのか」

気づくと、ゴトーはハイティントンの隣に立つていた。いつもの姿勢よりわずかに背中が曲がっている。彼女も多少は疲労を覚えている様子だった。

「私など眼中にない様子でした。全速力で追いましたがこの有様です」

「うん、体力的な差は仕方ないよ」

慰めるように笑いかける男。

彼女は苛立ちを抑えながら、次の指示を仰ぐことにした。

「それで、どうしますか」

「何を？」

「彼らです!!」

声を荒げるゴトーに対し、男の調子が狂う事はなかつた。

「あの二人はここに戻つてくる。いや、少なくとも鈴木聰太の方は間違いないだろう。そうだね、リニア・イベリンも来るだらうから、その時は今度こそ頼むよ」

「はい」

ゴトーは一層冷たい空気をまとわせて、きつく拳を握つた。

「おい……!!リニア!!いい加減……止まつてくれ!!さすがに足が持たない……!!」

152.psd

「……」

「大体……どこに向かつてんだ……!!」

「……」

前を行く彼女は俺の身体を気にすることなく、一直線に走り続けていた。

しかし、いくら俺が男だと言つても、戦闘経験のある女に比べたら明らかにスタミナが足りない。意識していないと足元から転びそうだ。

「おいリニア!! 何とか言えよ!!」

すると、彼女の足が急に止まつた。そして俺へと振り返る。いつもの笑顔はどこに行つたのか、彼女の顔は非常に強張つていた。

「何もなかつたって言つた!!」

彼女の怒鳴り声に思わず俺は後ずさる。

「リニア?」

彼女の目には明らかに怒りと、悲しみが浮かんでいた。

「さつき……さつき聰太何もなかつたつて言つた!! それなのに……嘘つき!!」

「あ、ああ。別に何もなかつたつて」

一パンチ

小気味の言い音が鳴つたと共に俺の頬が痛んだ。

「ふざけないで!! 私がいつもどんなに真剣に!! どんなに聰太のことを心配してると思つて
……!!」

泣き崩れるリニア。それでもまだ怒りは収まらないようだ。

「……悪かった」

俺は膝を抱えるリニアの前で謝罪した。

すると、彼女は答えるように俺の方へと腕を回す。その身体は興奮しているせいか、いつもより少しだけ暖かかった。

「確かに俺の方が言葉足らずだつたな」

「うん」

そいつて彼女は俺の首元で僅かに領いた。そして俺の肩に顔を埋めたまま、「……痛かった？」

「痛かった……つていうのは嘘」

「……また嘘ついた」

「ごめん」

俺もリニアも思わず苦笑した。

そして、俺は彼女の肩を掴んで真っすぐとその瞳を見つめる。

「俺、聞いたよ」

「何を？」

「img」

その言葉だけでリニアは理解した。大きくなつた彼女の瞳孔が驚きを示している。次の瞬間、リニアはすばやく身を翻して先ほどの研究室へと走り出そうとしていた。

しかし俺はその腕を離さなかつた。

「……さつきの奴ら。研究所の」

リニアは先ほどの俺以上に激昂していた。

「落ち着け。別に何かをされたわけじゃない」

「落ち着いていられるわけないでしょ!?」

「怒る必要はない」

「どうして!?」

「……」で俺が冷静さを失つたら、それこそ奴らの思うつぼだ」

「離して!! 聰太!!」

リニアは必死で俺の腕を振りほどこうとした。対する俺も彼女の力に負けないよう必死だった。腕一本。これだけは絶対に離さないと決めていた。

「離して!!」

「だめだ!!」

「離せ!!」

「落ち着けリニア!! 大体、何でお前が俺より動搖してるんだ!!」

「聰太が好きだからに決まってるでしょ!!」

静かな廊下に木霊する声。リニアは更に大きな声で叫んだ。

「好きだから!! 聰太が本当に好きだから!! だから……だから聰太が傷付くのは見たくない……!!」

俺は震えるリニアの手を強く握った。

「大丈夫だ、俺は平氣だ」

「でも……あいつらは、ingは聰太の人生を台無しに……」

依然として震えが取まらない彼女の手を、俺はより一層強く握った。

「いいか、リニア。俺はingなんてものも、その事を隠していたりニアたちも気にしていない。むしろ、気にかけてくれていた事に感謝している。だから、お前が責任を感じることは一切ない。最初からこれは俺の問題なんだ。だからさ、そんな悲しい顔しないでくれ。それに俺も強くなつた。大丈夫だ」

「……嘘」

やつと顔を上げたりニアはじつと俺を見つめていた。疑つている様な、悲しんでいる様な顔をしている。

「嘘じやない。嘘ついたら、またさつきみたいに殴られるからな」

俺は小さく冗談を零すと、再び真つすぐとリニアを見据えた。

「相手が俺を軽く見ていたんだ。確かに俺は三年前の事を何も知らなかつた。周りが教えてくれない事に違和感があつた、けどそれすらも考えないようにしていたのは事実だ。それで

も今は違う。俺は現実に絶望していない、俺はちゃんと今と向き合っている」

「私たちは怖かった……聰太がまた壊れてしまうと思つたら……」

「確かに以前の俺ならそうなつていたかも知れないな。ありがとな、リニア。たくさん心配してくれて。本当にありがとう」

俺は震える彼女の肩をそつと掴んだ。

「さつきお前に話さなかつたのは、単に心配をかけたくなかつたからだ。俺もまだ確信は掴めてなかつたし、俺の心配にお前を巻き込みたくないなかつた。俺はお前を悲しませるつもりはなかつたんだ。まあ、結局こんな有様になつちまつたんだが……」

「……」

「めん」

そう言つて俺は彼女の肩に手を回した。

「えつ……ちよつ、いきなりどうしたの!?」

リニアは突然の出来事に驚き、両手を左右に動かす。

「そ、聰太……?」

「…………ういう時くらいは大人しくしとけよ」

すると彼女はまるで石になつたかのようにじつとしていた。さつき殴られたせいだろうか、俺の顔は自分でも分かるぐらいに相当熱くなつてきている。

「…………その、これがお礼の品になるかわかんないけど」

「うん」

「…………今後はもう無しだからな」

そう言つとりニアは、寂しそうに尋ねる。

「え…………本当に、もうないの?」

「え?ええと、まあ。多分」

「本当に?」

「…………もしかしたらあるかも知れない」

するリニアは下がっていた両手をぐつと俺の背中に回した。そして俺は彼女を抱きしめたまま、ゆっくりと口を開く。

「俺はもう一度あの研究室に向かう。まだあの男とは話しあっていないんだ」一呼吸あけて俺は彼女へと問いかける。

「助けてくれ、リニア。一緒に来てほしい」

彼女は予想通り、いつもの笑顔を俺に向けてくれた。

「もちろん!!」

「やあ、もう一度ここに来ると思つていたよ」

ハイティントンは笑顔で俺を迎えた。しかし先ほどとは違い、彼は部屋の外に立っている。

そしてその隣には冷たい目つきをした女性が、どこか俺に対して憎しみを含んだ瞳を向けていた。

「まだ補習授業は終わってないからな」

「そうだね。眞面目な生徒で感心するよ」

リニアは息を潜めて俺の隣にいた。依然として彼らに対して怒りを抑えられないのか、その表情はいつになく真剣だ。

「リニア、大丈夫だ。相手は危害を加えるつもりはないらしい」

「……本当に？」

「……たぶん」

俺は男の隣に立つ女性に目を向けた。

「あの女性がどんなふうに出てくるかによるけど」

「なら先手を打つ」

リニアが一步前に出る。すかさず俺は声を上げた。

「あの!! その隣の女性は誰ですか」

男は一瞬驚きを見せた後、少し考えた様子をしたまま、

「うん、分かりやすく言うなら助手ってところかな」

「なるほど」

互いにどう出でてくるのか。張り詰めた緊張感の中、再び男が口を開いた。

「心の整理は終わつたのか?」

「……さつきも言つたが、俺は何も影響を受けていませんよ。それより、わざわざ部屋の外まで迎えに来てくれるなんてご丁寧ですね」

するとハイティントンは大きく笑いながら、俺の隣のリニアを見た。

「君を気に入っているのは確かだが、何より君の隣の女性が私の研究室の扉を壊してくれたからね。これ以上、被害を大きくされて警備員やらに問い合わせられるのも面倒臭いんだ」

「あら、別に窓を割つて侵入しても良かつたんだけど」

「ははは、それはさすがに困るなあ。まだ小さい被害で済んでよかつたよ」

一見談笑しているようにも聞こえるが、明らかに彼らの間には絶対に相容れない境界線の様なものが敷かれているように見えた。

「さて、鈴木君。中に入つてくれ」

「……はい」

「私も行くわ」

リニアは俺の腕を掴んだ。俺も頷いて同意を示す。瞬間、今まで一言も発しなかつた女性の口が開いた。

「この部屋には一人だけしか入る事が出来ない」

その言葉にリニアの眉が反応する。

「……理由は？」

「ハイティントンの指示だ」

「それ、無視したらどうなるの？」

彼女の言葉に答えるように、女は腰を低くして腕を構えた。

「力で解決するのみ。先ほどの様には上手くいかないぞ」

「ふーん。私もそっちの方が楽だと思つてた」

そう言つてリニアは俺に背を向けた。

「すぐに片づける」

「ああ、無理はするなよ」

「もちろん！」

そして俺は、男が入つていった部屋へと足を進めた。

「はあ……結局私はまたこの女とか」

リニア・イベリンは相手を前に、深いため息を零した。

二人は満足に戦える場所を求めて、校舎の外に出ることにした。昼間に降っていた雨もやみ、足元の条件も互いにフェアだと言えるだろう。

「まあでも、とつとつ叩きのめして戻ればいいだけね」

意気揚々と宣言をするリニア。そんな彼女を気に入らない様子で睨む女性——ゴトー・フリー
ドリヒ。彼女の視線は凍てつくように冷たい。

「口の悪い女だ」

「あなたも相当だと思うけど？」

睨みあう二人。一方は素手、もう一方は、

「わお。殺伐としてるわね」

リニアは目の前の女性が懐から取り出したものを見て、思わず感嘆の声を上げた。ゴトーが手にしていたのは鞭だ。それも乗馬などに使われる短いものである。

「リニア・イベリン。イベリン家一族の長女であり、ハンス・ブリーゲルの全てを受け継いだ者。そして金色の魔女の弟子。私もやや似た境遇なので興味があつた。協会の子供よ」

「非常に不快だな。そんな風に呼ばれるのは。銀髪の魔法士と呼んでくれない？」

そう言つてリニアは軽く地面を蹴りあげた。そこはアスファルトで覆われた場所ではない。リニアの上げた足は上埃を纏つたまま、ゴトーの顔面に降りかかる。彼女の視界が奪われている瞬間に、リニアは全力で走りだした。

「なつ……！」

ゴトーが動く前に彼女は先手に出た。初めに脇腹を突き、その勢いを消すことなく下半身に蹴りを入れる。その後軽い一撃を加えて氣絶させる——これがリニアの描いていた計画だった。
「名前通りの勢いだな」

ゴトーは決して動搖することなく、リニアの一撃一撃を冷静に見極め、寸でのところでかわしていく。対するリニアも口笛を吹いて相手を評価した。

「なかなかやるじゃない」

「汚い手だ」

「これでも急いでいるからね」

リニアは真っすぐとゴトーを見据えた。しかし彼女はその視線を受ける事なく、じつと自身の手元、その短い鞭を眺めていた。冷静に、静かに、決して微動だにすることなく彼女はただその一点を見る。

その気迫に思わずリニアも身構えた。先ほどの空気とは明らかに違う。

「……」

——相手は自分と同じ女性だ。まず身体的なハンデはない。ならば自ずと戦闘スタイルは私と似てくるものだ。差が出るとすれば、それは経験。能力。

しばらく考えた後、ゴトーはゆっくりと顔を上げた。そして素早く前に出て腕を振り上げる。彼女の鞭は一般的なものと違い、孤を描くものではない。一直線に、殆ど棒と言つても過言ではないほどの威力と銳さを持つ。

リニアは彼女が腕を振るう軌道を一瞬たりとも逃すことなく、的確に避けて行つた。その独

特の攻撃形態にリニアは考える。

「瞬発力では確実に相手の方が一枚上手だ。

しかしその思考こそが、彼女と自身の違いを冷静に分析できるようになつたのだ。自身に瞬発力がない分、相手よりは集中力があるはずだと。

「くつ……」

依然としてゴトーは鞭を振るう腕を休めることはない。リニアの耳にはずっと、しなり続け
る鞭の音が聞こえていた。

リニア・イベリンは協会内でもハンス・ブリーゲルの弟子として、主に体術を用いて戦闘するスタイルであり、それは協会内だけでなく研究所内にも知れ渡っていた。故に戦闘においてその腕もかなりのものである。

しかし、そんな彼女でもこの状況では自身が不利だと感じずにはいられなかつた。もちろん体力的にも精神的にもまだまだ彼女には余裕がある。しかし、言い知れぬ不安がじわじわと彼女の胸中には広がつていた。

「……いけない、いけない」

リニアは少しげこちないが、努めて笑顔を消さないようにした。それは自身の心理的安心感を得るためにもある。

「私は金色の魔女の弟子だ。あのハンス・ブリーゲルの師事だつて受けている。

「こんなところで倒れたら、二人に何て言われるか」

戦闘中でもこの様な言葉を口にできる当たり、彼女自身もまだ余裕があると思つていた。しかし不安感が拭われる事はなかつたのだ。

「このつ……何だつて言うの……!!」

再びリニアは繰り出される攻撃に集中した。いくら隙のない攻撃だとしても、必ず綻びというものはできるはずだ。

研究所の人間が協会と戦える理由は何か。それは科学を用いているからだ。科学の力——それはつまり兵器である。兵器は相手を殺すことも、自身を守ることもできる。現在を保存する協会と違い、前へと進み続けようとする研究所。彼らのその姿勢は兵器にも現れ、常に最新銃のものを生み出し、それを用いて彼らは自己防衛を果たすのである。

代表的なものは拳銃だ。魔法士と雖も身体は生身の人間。撃てば死に至る。もちろん防弾チョッキや魔法を用いれば、話は別だが。しかし全員が常にそれらを用いているわけでもない。故に協会内は莫大な被害を受けてきた。要は前知識があり、且つそれに対する予防が万全ならば、明らかに協会側に軍配は上がるるのである。

しかし、今リニアが相対しているのは彼女にとつて初めての武器だった。

普段見慣れないもののせいで、軌道はもちろん間合いすら掴む事が難しい。リニアは相手が振り上げた腕の位置、角度からおおよその狙いをつけて避けるしかないのだ。それ故、上手く問合いか取れなかつた場合はかすり傷を負うしかない。

——けど、刃物や拳銃に比べたら威力は弱い。

そう思い、再びリニアは自身を鼓舞する。このまま戦いが続ければ、ゴトーの体力が先に尽きるのは明らかだつたからだ。

「……隙あり !!」

リニアは彼女の足めがけて踏み込む。しかしゴトーは一瞬驚きを示したものの、すかさず身体を後方に退けてかわした。そして攻撃を再開する。

変わらない。彼女はずつと同じ軌道を繰り返していたのだ。相手の顔色をうかがいながら、間合いを徐々につめて行く。それに伴いリニアの身体も自然と後方へと追いやられていくのだ。

「……まさか !!」

リニアの額に冷や汗が流れた。

「ずっと同じ攻撃をしていたのはそういうことか。こつちは体力温存しながら最小限の動きで躱してきていたのに……」

そう、ゴトーがやっているのは勝つための攻撃ではなかつた。相手の体力を減らす事を目的としていたのだ。

「なめるなつ !!」

リニアは勢いよく手を伸ばして彼女の鞭を掴んだ。左手に走る激しい痛み。リニアは痛みに

堪えながら前にでた。

しかし、直後。視界が反転したと思つた時には、遅かつた。

気づくとリニアは宙に浮いていた。

「なつ……!!」

そして小さな悲鳴と共に彼女の身体は一直線に地面へと叩きつけられた。

全身を鈍い痛みが巡る。リニアが目を開けると、すぐ目の前でゴトーが冷ややかな視線で彼女を見下ろしていた。瞬間、彼女は自身の身に何が起きたのかを理解する。

一休術。只でさえ消耗していた体力に、鞭を掴んだことで生まれた一瞬の緩み。そこを付け込まれたというわけか。

リニアはつくづく自分の戦闘スタイルとは相性の悪い攻撃に頭を悩ませた。そして、ゆっくりと身体を起こすと服についた土埃を払う。

「けど、まあこれぐらいなら何とかやれそうね」

「ほう」

「それより、今ここでトドメを指しておいた方が良かつたんじゃないの？」

「私はあなたと違つて、勝つためには手段と方法を選ばない人間ではない」

「そう？」

ゴトーは再び鞭を構えた。その姿を見て、ふとリニアは思い出したように口を開く。

「……その構え方って、もしかしてフェンシングみたいな感じ？」

「敵対する相手に教える義理はない」

「ひどいな。互いに命懸けて戦つてるんじやないの？」

「リニア・イベリン相手に懸ける命などない」

その言葉が多少頭にきたのか、リニアはにつと口元を緩め姿勢を落とした。

「そうね、私も殺人者になるつもりもないから命懸ける必要はないわね」

そう言つてリニアは両手を合わせて指を解すと、

「けれど、緊張感つていうのは大事じやない？」

175psd

リニアはポケットから紙束を取り出した。そして相手の動きを気にせず、一気に三枚の紙を床にばらまく。

瞬間、ゴトーは気付いた。しかしリニアの行動の方が早かつた。彼女は凄まじい勢いでゴトメがけて突つ込む。先ほどまで防御一点の相手とは思えないほど無謀な攻撃だつた。

リニアが進む度にその速度は上がっていく。彼女がばらまいた紙には速度をあらわす表意文字が書かれており、一枚の効果が終わることに次の紙が発動する仕組みである。最大十秒。

しかしこれだけの時間があれば相手の間合いに入ることは容易だ。

リニアはゴトーの目の前に近づくと、すかさず拳を打ちこむ。対する彼女も防御へと転じるが、既にリニアの拳は彼女の懷に深く食い込んでいた。

瞬間の静寂の後、ゴトーは膝から崩れ落ちていった。必死に意識を保とうとするが、彼女の瞼は徐々に閉じて行く。

——痛い。

その感情だけがゴトーの脳内に漂つていた。決して相手を甘く見ていたわけではない。リニア・イベリン。研究所内でも危険視している人物だ。それでもゴトーの戦法は彼女にはあま

り効果がなかつた。それをゴトーは見抜けなかつたのだ。

「くつ……」

ゴトーは痛む上半身を抱えながら、ゆっくりと立ち上がつた。そして腕を構える。やや視界がぼやけているが、彼女には関係なかつた。

ふと、彼女は自身が握つている鞭にひびが入つていてことに気付いた。

—あとどのくらい持ちこたえられるか。

そんな焦燥が彼女の心中に広がる。それでもゴトー・フリードリヒは口元に笑みを浮かべた。

「これからが全力だ……!!」

「君はこの世界についてどう思う」

唐突な質問だった。

「……俺はそんなスケールのでかい事考えたことないんでよくわからないですね」

俺はハイティントンと正面から向き合い、きっぱりと告げた。

「へえ。過去に世界を救つた人間の言葉にしては意外だな。まあ、でもそれが最も君らしい答えなのかも知れないね」

「それは皮肉ですか？」

「とんでもない、そんなはずないじやないか」

男は苦笑したまま続ける。

「それじゃあ君は、いつもこの現実の世界をどんなふうに見てるんだい？」

本当につまらない質問ばかり聞いてくる。

「そんな無駄な事、考えた事もないです」

「じゃあ今考えてみてよ」

仕方なく俺は考えをまとめることにした。

「……人間関係っていうのは複雑だ。どちらかに傾くと悪い面だけが見えるし、それでももう一方に傾いてもおかしい気がする」

「私はこの世界について聞いたんだが？」

「同じ事ですよ。つまり俺はどちらに傾くことはない。俺は真ん中にいたい」

男は俺の言葉の続きを静かに待っていた。

「この世界をどう思うか？そんなの色々な見方があると思う。肯定的な人、否定的な人、様々だろう。俺は普通に生きたい。ありのままを受け入れる。ありのままを一生懸命に生きていくしかないと思つていて。これが俺が世界について思う事だ」

「それは理想主義者を否定するということか」

「違う。理想主義者には理想主義者なりの現実があるんだろう。俺が見えていないだけで、彼らはその現実をより現実的にしようと生きているだけだ。俺はそれを否定しない。ただ俺は、一日一日をしつかり認識して生きている。目の前にあるものを一つずつ片づけていくだけだ」

「なるほど」

そう言つて、男は両手を組んで俺を見つめた。

「目の前の現実をありのままに受け入れる。それが君の見ている世界か……ふむ、それなりに満足のいく答えだよ。ありがとう」

ハイティントンは勝手に礼を述べると、先ほどより深く椅子に座りなおした。そして俺の後ろにある扉を、気まずそうな顔で見つめる。

「……これでも私、普通に教授として通っているんだけど。あの壊れた扉……どうしようか」
いくらなんでもやりすぎだ、リニア。

「……なんか、すいません」

「ああ、大丈夫、大丈夫。何かしら理由を考えるよ」

俺が軽く頭を下げると、男は何てことない笑顔で笑いかけてくれた。

「私はこれでもう退くつもりなんだ。私は私なりの余生を楽しもうと思つていてね。ベルコルも敗北し、急進派も全滅。残つてているのは、一部の原論主義者と稳健派。議会はほぼ稳健

派の思い通りになつていくだらう。そして私も離れる……研究所もただの組織になるに違いない」

ハイティントンは俺の相槌を待つことなく、続きを述べる。

「私の用事は二つだつたんだ。一つは君に眞実を伝える事。もう一つはing、鈴木聰太という人間がどんな性格をしているのか、いやその資質を見に來たんだ」

「……それで俺の、その資質とやらはどうだつたんですか」

すると彼は大きく肩を上下して笑つたかと思うと、

「私が想像していたものとは正反対だつた。いや、だから納得できたのかも知れないな。現実そのものを認める事が大変でも、そうだな、そんな風に自分の人生が充実していたなら……」

ぶつぶつと独り言を呟く男。ふと、彼は顔を上げた。

「ingが発動する条件は簡単だよ」

「え？」

「いや、etcが発動する条件は自身の現実を認め、先に進むことだ。そうすれば自然と心に突つかかっているものも消えてしまう。その時、etcは発動する」

「……口で言うには簡単そうですね」

「表情が硬くなつたよ」

見抜かれていたか。

『img発動条件。それは誰でも克服しなければいけない、一種の自己訓練だ。『現実を認め、前に進む』。そうだな、たとえば君の身近にいる少女……九条奏も使えるということは彼女も自身の現実を認めたということだ』

それはつまりー、

「……俺はまだ現実を認めてないところとか」

「いや、君は現実を認めている。そして前に進もうともしている。だが」

「だが？」

俺は男の言葉を繰り返す。すると彼は一瞬躊躇うような間を空け、

「続きを言わないのでおこう。君自身で明らかにすべきだ。まあどうせ君はingになんて関心ないだろうけど」

「その通りですね」

俺がそう返すと、男は満足げに口元を緩めた。

「最初から君と戦う気はなかつたよ。少し助言をしに来ただけだつたのにな……彼女が来るとは予想していなかつた」

「リニアですか？」

「ゴトー君は彼女に関心があつたようだね。悪いけど、私の個人的な用に彼女を巻き込んでしまつた」

そこでやつと俺は察した。それと同時に安堵の……いや疲労からのため息が零れる。

「……結局、俺たちはあなたの掌の上で踊らされていたつてわけか」

「まさか。教授が生徒を弄ぶわけないだろう」

「……本当ですか？」

「はははつ !!」

**

「はあああ !!」

ゴトーは雄叫びをあげてリニアへと突進した。全力で行くと言った彼女の攻撃は、言葉通り、先ほどよりも更に鋭さと正確さが増していた。

リニアは接近戦に持ち込んだと思っていたが、再び彼女から距離を取らざるを得なくなる。

「いつ…… !!」

リニアの身体に痛みが走る。先ほどの落下の衝撃だろう。重傷は免れたもののまともな受け身を取れずに落ちたため、打ち所が悪かったのかもしれない。

依然としてゴトーは冷たい表情でリニアへと近づく。瞬間、リニアは懐から取り出した紙を彼女へ向けて放つた。そこに書かれていたのは『稻妻』という文字。そしてそれはゴトーの

頭上付近になると、激しい音と閃光を発した。

「くつ……!!」

リニアの攻撃にゴトーも思わず足を止める。しかし、彼女は予めこの攻撃が来ると予想していた。リニアが紙を投げたと同時に、彼女は肘で両目を覆っていた。そして閃光が光る前に、彼女はその効果範囲外にまで身を引いていたのだ。

自身の攻撃、しかも割と切り札にも近い魔法を用いた技が見破られてしまつた。リニアの胸中に広がる焦燥。

すると唐突に彼の顔が頭の中に浮かんだ。リニアにとつてとても大切な人——聰太がいる校舎の方を彼女は見た。戦闘が行われている気配はない。

「エドモン・ハイティントンに戦闘能力はなさそうね」

「私にはある」

そう言つてゴトーは前に出ると、勢いよく腕を振り上げた。

ひびが入つたせいだろうか、鞭が描く軌道は先ほどと異なつてゐる。しかも変則的な動きをするそれは、戦いづらさをより増してゐた。

「さつき粉々に壊しとけばよかつた……」

リニアはひとり後悔する。対するゴトーは淡々とした表情で鞭を振るい続けていた。暗殺でも隠密でもない、正々堂々の貴族的な決闘に固執する彼女は今時の研究所の人間にしては珍しいタイプだ。

「あの鞭がある以上、肉弾戦はほぼ不可能。かといって無防備に飛び込むこともできない」

再び魔法を用いて接近するか、リニアは逡巡した後すぐにその策は無視した。あれは一度の奇襲でしか意味がない。ゴトーのような人間には既に対策が取られている事だろう。

「……目的は何なの？」

リニアの問いかけにゴトーの腕が止まつた。対話に応じるという証だ。

「見たところ、あなたは聰太に関心なさそうだし……それとも私？」

「何かおかしな考えをしているようだな」

そう言つてゴトーは額についた汗を拭つた。

「私はエドモン・ハイティントンに雇われたボディーガードだ。彼の身辺を保護し、彼に害

する者を排除する。それが私の使命だ」

「へえ、随分と素敵な関係ね。護られる男と護る女か……興味深いわ」

感心しながらニアは一步前に進んだ。距離を詰めるための窮屈の一策だ。今、彼女が考えられるのはこの方法しかなかつた。

「鈴木聰太。研究所や協会内では非常によく知られている人物だ。もちろんそれも三年前からの話だが。エドモン・ハイティントンは戦いに来たわけではない。鈴木聰太という人間に会うためにこの都市に来たのだ」

「相手の事情も聞かずには近づくなんて失礼じやない？大体、聰太に『ingはお前だ』なんて伝えに来ただけっていうのも怪しいし」

リニアの口調はやや怒氣を帶びている。今まで隠してきたことを、こうもあつさり他人に暴かれてしまつたせいだろうか、いやそれだけならまだしも、彼らは彼女の一番大切な人に何の躊躇もなく手をつけてしまつたのだ。

「あなたにはわからない。ingは既に確認されていゝetcの中でも特異なものだ。そして――ゴトーはなんて表現すればわからないのか、一瞬口を濁すが、

「ing……自らの運命を開拓する能力。だが社会、あるいは世界は一人で成るものではない。そこには数多くの人間が存在している。それはつまり一人の運命が変わるだけではなく、それに伴い多くの人間の運命も変わることになる。使用者に残るのは深い絶望だけだ」

「研究所なら有効活用できるつてこと?」

「断言はできない。それ以前に研究所は別の手段に用いる可能性があるからだ」

ゴトーはそつと目を閉じた。そして再び口を開く。

「あなたたちは……いや協会はetcの脅威を正しく認識していない。etcという物理法則からかけ離れた多くの現象。いわば正体不明の刃物を持ち歩いている子供に過ぎない。それを危険かどうかも知らずに振りかざす、危険な存在」

すると突然、彼女の顔に影が差した。リニアは今まで無表情だったその顔に初めて表情を見る。

ゴトーの視線の先にあるのはハイティントンと鈴木がいる校舎だ。

「研究所でetcを研究しているのは急進派だつた。もちろん穩健派にもいるが、おそらくその危険性を正しく認識している人物は殆どいないだろう。ベルコルですら怪しい。だが、ハ

イティントンは、もしかしたらその危険性を充分に理解しているのかもしれない

「それで？何をどうするつもり？」

リニアは自身の攻撃が成功するだろうという距離まで近づいていた。後は一気に距離をつめるだけだ。

彼女は一気に加速して、ゴトーの身体に紙を張り付ける。書いた文字は『火』。リニアが退くと同時に、彼女の身体から真っ赤な炎が燃え上がった。

だが、すぐにリニアは落胆する。ゴトーは火がついた途端に、すかさず羽織っていたコートを脱ぎ捨てたのだ。

「これもだめか……」

「やはり同じパターんだな」

気づくとリニアの背後に誰か——ゴトーが立っていた。

「ハンス・ブリーゲルの弟子。スタイルは完全に異なるが行動は酷似している」

急いで身を退くりニアだつたが、その頬を彼女の鞭がかすめた。軽く触れただけでもそれな

りの量の血液が流れる。リニアは頬の傷を拭いながら、ゴトーヘと目を向けてた。

「当たり前だ……」

「イベリン家由来の技とかはないのか」

「うるさい!! 家の話はするな!!」

リニアは家の話題になつた途端、声を荒げた。

「私がハンスについていつたのは十歳からだ。その前までは父親の家にいた……イベリン家の全てを受け継がせるためだけに……あんなクソみたいな家……」

ゴトーの反応も見ず、リニアは面白を続ける。

「メイドは皆、私が母親に似ていてるという……母親と似ていてるから何だつて言うんだ……私は死んだ人間の代わりなの? 全てを要求してきたから、私はそれをこなしてきた。それなにあの人は……!! だから私は家を出た」

「血を流し過ぎたか……興奮状態に陥つたな」

「勘違いするな。私は忌々しい名を聞いて、嫌な事を思い出しただけだ」

「そう、なら戦闘を再開するぞ」

ゴトーは急速にリニアに接近した。それにも関わらず、リニアは顔を上げることはない。

「ああ、そうか。私が魔法を習った理由はあの男に対するトラウマを消すためだつたのかも
しれない……ロミ……ロミ……私はロミじやない!!」

絶叫と共に彼女の脇腹に激痛が走つた。鞭の硬い部分が直撃したのだ。

「……ビンゴ」

突如、リニアは口元に笑みを浮かべた。とても不気味な笑顔だ。

「……これでゼロ距離ね」

「なつ
!?」

ゴトーはすかさず後方に抜けようとした。しかし、リニアは彼女の腕を強く掴む。

「やつと釣れた」

「くつ……こんなバカみたいな手に……!!」

次の瞬間、強い痛みがゴトーの身体を襲つた。

そして彼女の意識はそこで途切れる。

俺が扉を開くと真っ先に彼女の姿が視界に入つて來た。満面の笑みでサインをするリニアと、彼女の足元ではゴトーという女性が氣を失つていた。

「その人は大丈夫なのか？」

「ああ、うん。多分大丈夫」

「たぶんつて……」

「それより補習授業はどうだつたの？」

「……まあ個人的には満足だな。すつきりした」

「……そつか」

そして俺は大学の正門を目指して歩き出す。

「帰るぞ、リニア」

「……うん!!」

**

ゴトーが目を覚ますと目の前は暗かつた。暖かさも感じる。

「ああ、起きたのかい？」

「……!?」

彼女の目の前に広がっていたのは男の背中だつた。ハイティントンはゴトーを背負つたまま、道中を歩いていたのだ。通り過ぎる一般人がくすくすと笑う声がする。ゴトーは恥かしさの

あまり身体を左右に動かした。

「……降ろしてくれ!!」

「ああ、私は大丈夫だよ。それより君、私のボディーガードじやなかつたの?」

「……すまない」

しおらしくなるゴトーに対し、ハイティントンは穏やかな口調で語りかけた。

「君のわだかまりは解けたかな」

「え?」

「リニア・イベリンと会つてみたかつたんじやないの?」

男の問いかけに彼女は何も言わなかつた。

「正直に言つてごらん。別に私は叱つたりしないよ」

「……私と彼女の環境が妙に似ていた……大きな家に生まれるというのは大変だ」

「そうだね。それで君の敗因は?」

すると彼女は急に顔を赤らめて、そっぽを向いた。

「実力で負けたわけじゃない!! 汚い手に騙されただけだ!!」

「はいはい……あ、 ちょっと !! あまり暴れないと危ないだろ !!」

ハイティントンはニコニコと笑いながら、決して彼女を降ろす気はなかつた。

「そつちはどうだつたんだ?」

「ん?」

「鈴木聰太にを教えたんだろう」

「ああ、 うん。 教えたよ」

彼は一息置いた後、彼女の質問に答え始めた。

「それなりに満足したよ。 ベルコルはきっと勝てないだろうね。を保有した人間があそこまで現実的だとは思わなかつた」

そう言つて、ハイティントンは小さく笑う。

「私の目的は果たされた。彼に自身の正体を明かし、etcが覚醒するための条件も教えた。ベルコルへの貸しは返せたんじやないかな」

月夜に二つの影が揺らめいている。彼らの間を冷たい風が通り抜けた。

「ゴトー君……今まで私を守つて来てくれてありがとう。負担だつただろうね。でも君のおかげで平和に過ごせたよ。これを最後にしよう。もう君も君の道を歩いていいよ」

「……ない」

「ん？」

彼女は男の背中に顔を埋め、消え入るような声で答えた。

「……負担ではない」

「……そう？ それなら……良かつたよ」

そう言つてハイティントンは夜空に浮かぶ丸い月を仰ぎ、柔らかな笑みを浮かべた。

「これからも頼むよ、ゴトー君」

「……うるさい」

「うん、それなら静かに歩こうかな」

月が二つの影を優しく落とす。それは寒空の下でもどこか暖かそうに見えた。

「今後はどうするつもりなの？」

帰り道、リニアは真剣な声音で俺に問いかけた。

「全部知っちゃったんでしょ？」

「ん？ああ、そのことか。そこまで深刻に考えないようにしているけど」

するとリニアは不思議そうな顔で首を傾げる。

「今はそんなに深刻に考える時じゃないと思う。そのままにしといても大丈夫だろ」

「……本当に？」

「本当。もう嘘はつかないよ」

しかし、なおも彼女は疑わしげな視線を向けている。

「……そんな目で見るなよ。あ、お前血出てる」

リニアの頬から真っ赤な血が流れ落ちた。先ほど見た時は止まっていたのに、それなりに深い傷だということだろうか。俺は懐から取り出したハンカチで彼女の頬に触れた。

「顔に傷つくるのはまずいだろ……後にならないといいけど

「そ、聰太!!」

「は、はい!!」

突然大声を上げたりニアに驚き、つい敬語になってしまった。見ると、彼女はどこか情緒不安定に思える。

「あ……そ、そのハンカチ私が洗うね」

「……何だよ急に。大体、お前んところの洗濯は全部俺がやつているだろ」

「あ……あ、 そうだったね。 あはは、ごめん」

あからさまにぎこちない笑顔だ。俺はしばらく考えた後、彼女の手持無沙汰な左手にそのハンカチを握らせた。

「今日のことはこれ以上聞かない様に」

「ええ!? そんな……!!」

「それじゃあハンカチは返してもらおう。どうせ自分で洗えばいい話だ」

「え、え、駄目!!」

「じゃあ、もうさつきの話は終わりだ。これ以上追及するなよ」

「え……うん……」

ふと、俺は夜空を仰いだ。

今日の月は明るい。街灯の明かりもそいかしげに見え、何だか幻想的な雰囲気だった。

「So I look to my eskimo friend. I look to my eskimo friend. When I'm down' down' down...」

「……何の歌だ」

空港の待合室。

トニーは隣で歌を口ずさむハイティントンに謝しげな視線を向けた。

「ああ、これ? ルイーゼが亡くなる前によく歌ってたんだよ」

「……」

「エスキモーっていうタイトル。個人的にこの歌詞が好きでよく聞いているんだ」

「エスキモー?」

ベバババムヽは頷く。ベベト声の歌詞を紹介始めた。

「 I find myself disposed..° Brightness fills empty space..In search of inspiration...° So I look to my eskimo friend...° I look to my eskimo friend...When I'm down' down' down..」

「……悲しきな曲なんだ」

「ハイ一やにはお似合ひだよね」

そして男は一度目を閉じる、淡々とした声音で述べた。

「私はね、この歌etcもこの曲のに対しての考えが込もられてる気がするんだ」

「……」の歌だ。

「ああ、私が会場に行く友達....etcもHスキモーみたいな感じがする」

「理解し難いな」

「わからなくてこよ、これは私の個人的な感想だから」

ハイティントンは静かに笑う。ふと、室内にアナウンスが流れた。便名と目的地が告げられた後、搭乗案内が開始されたと流れる。

「さて、行こうかゴト一君」

「はい」

そう言つて彼らは立ちあがつた。向かう先はどこか、それはきつといっこからもつと遠い場所なのだろう。

後日、俺は偶然構内で先輩と出くわした。

「よつ、鈴木」

「……先輩」

笑顔で声をかける彼に対し、もちろん俺は複雑な表情を浮かべていた。結局、この人が原因を作ったと言つても間違いではないのだ。

「まあまあ、鈴木よ。男同士の仲だ、そういうこともあるだろう！」

「……俺がどんな目に合つたかも知らずに」

「ん？ 何があつたのか？」

先輩は不思議そうな顔をするが、詳しく話すつもりもなかつた。

「別に大した事じやないですよ。それよりもあの授業の単位は貰えたんですか？」

「ああ、本当に変わつた教授だな。殆どの人が△を貰つたらしい」

若干の適当さを感じるのは否めないが、ここで先輩がまた一步卒業に近づいたと思うと、俺も内心ホッとしていた。

「まあ、一応鈴木のおかげもある。ありがとな」

「え……いや、俺は何も」

思わず視線を先輩から逸らすと、構内に掛けられた時計に目がいった。

「あ、すみません!!俺この後予定があるんで、失礼します!!お疲れ様です!!」

「おう!!気をつけて帰れよー」

「はい!!」

そうだ、本当に大したことはなかつたのだ。けれど、内心では未だに整理はついていない。
ing.....etc。俺とは全く関係がないと思っていた。いや、思つていたかつた。

それでも、俺が今いるこの現実はー。

「う……」

椅子に深く腰掛けていた男が目を覚ました。彼は何故自身がここにいるのかわかつていなか、辺りを見回す。闇。暗闇だ。

次に彼は自身の四肢を確認した。両腕、両足とも何かに縛られてはいるが無事に動くことを確認すると、彼は軽く瞬きをする。闇——ではない、僅かな明かりが奥から漏れていた。

「……」

男——フーゴ・ベルは、もう一度ここまで経緯を思い出そうとした。そして十秒の後、彼は全てを理解した。

先日のリニア・イベリンとの戦闘後、協会の人間に連行されこの場所に監禁されたのだ。今後、どのような処分が取られるのか。処刑あるいは、情報提供——しかし後者の場合、協会内でもフーゴと言う男の口の堅さは有名なはずだ。

——では、何故俺は生きている。

捕まつた場合は処刑されると考えていた彼にとつて、現在の状況は非常に理解し難かつた。

そこでフーゴは更に気付いた。リニアとの戦闘後、かなりの傷を負っていたはずだが、それ

らが全て治療されていたのだ。その気になれば脱出をすることも可能かも知れない。

「……」

普段から口数が少ない方の彼だが、今の彼は一言でも口に出そつとすると違和感を覚えた。かなりの間、喉を使用していないということだろうか。

彼は言葉を発することを諦め、他の仲間がどうなつたかを考えた。元々、etcの文書を奪取するため日本に来たが、彼の一番の目的は自身の研究内容と一致する——リニア・イベリンに会う事だった。

何故、1%の人間は魔法を学ぶ事ができないのか。彼はいつも考えていた。99%の人間が学べるもの果たして学問と呼んでいいのか。それ以前に魔法はetcの一種、それを否定する者はいないのか。そんな疑問から彼の研究は始まつた。

しばらく経つた後、彼は協会内にも魔法を扱えない人間がいると知つたのだ。リニア・イベリン一協会は彼女の存在を外部に漏洩しないよう注意し、また才能がないと決めつけた。しかし、フーゴの考えは違つた。魔法を扱えないのは、その人間固有のetcがそれを拒んだ

せいではないのかと。他のetcよりも更に上位のetcを保有しているからではないのかと。
1%の人間が持ち得る可能性、それをフーゴは追い続けているのだ。

そして、偶然にももたらされたベルコルの計画。フーゴはその計画の中にリニアの名を見る
や否や、すぐにこれに賛同したのだ。

「くつ……」

フーゴは唇をきつく噛んだ。リニアに敗北し、結局何も得ることのないままこのように囚わ
れてしまつた自身に腹を立てていた。しかしそんな感情も一時のものだ。すぐにこれらは意
味のないものだと見なす。自分は間もなく処刑されるに違いないからだ。

—あの計画が失敗していたとしたら、急進派は没落。研究所は穩健派が霸権を握ることにな
る。

—急進派は終わつた。

彼はそう推測した。だとすれば、今後研究所は協会と無暗にぶつかることも争いが起きる」
ともないだろう。

キイツ

突然、何者かが彼の部屋に入つて來た。フーゴは思わず差し込んでいた眩しい光に目をくらませる。

「フーゴ・ベルだな」

自身の名を問う男の声に、フーゴは頷いて返事を返した。

「何故ここに監禁されているのかわかるか？」

「……俺は捕まつたんだな」

「安心しろ。乱暴を働くつもりはない。君が捕まつて幾日過ぎたかわかるか？」

フーゴは口を閉ざしたまま、首を横に振つた。

「噂通りの口の堅さだな」

「……目的は何だ」

フーゴはじつと目の前の男を睨んだ。目的——自身を生かし続ける理由は何か。

「我々の目的は君の研究だ」

思わぬ言葉にフーゴは更に困惑した。

「一応言つておくが、君たち急進派と呼ばれる連中の計画は失敗した」

「そうか」

「……手短に話そう。協会の仲間になる気はないか？君の研究に興味がある」

瞬間の驚きはあれども、フーゴはすぐに冷静さを取り戻した。協会の仲間になり、協力するということは、一時であれ処刑される時期は遅くなるだろう。しかし成果を上げた後、唐突に処刑される可能性もなくはない。

フーゴは男の真意を測りかねていた。

「……研究結果のみなら、私を拷問して吐かせた方が早いんじやないのか」

「そうだが、それはあまりにも残酷すぎるだろう。私は血を見るのが苦手なんだ」

「……そうか」

「それで、協力してくれる気はあるのか？」

フーゴはしばらく考えた後、

「一日だけ考える時間がほしい」

「わかった、起きたばかりの相手には唐突すぎるからな」

男が背を向ける。ふと、フーゴはその背中に問いかけた。

「ロベルトはどうなった」

「……まだ君に話すつもりはない。私が話に来たのは協力するのかしないのかを問うためだ」
その男の態度で彼は察した。ロベルトは死んだのだと。フーゴは静かに目を閉じる。そして
やつと目の前の男に何者かを問い合わせた。

「……お前は何だ」

男はどう告げるべきなのか、考える様子を見せた後、静かに口を開いた。

「周りの人間には、アルゼンチンの男と呼ばれている」

そう言つて男は扉の外に消えていった。再び静寂と暗闇がフーゴを覆う。

「……あの男は、一体何を考えている」

彼の独白だけがこの小さな部屋に響いていた。

- Track. 6 「Eskimo」 End. -

212.psd

それはある寒い日のことだつた。年末が近づきつつある季節、幼稚園では一斉大掃除が行われる予定になつており、園長の天城紫乃の指示の下、鈴木聰太、リニア・イベリン、九条奏の三人はこれに動員されていた。

大掃除と題する以上、それは普段使用している部屋はもちろん、あまり手をつけることのない場所までこの機会に綺麗にしてしまおうという所存である。

「よいしょっ……と」

リニアは園内でもその存在を知る者は少ないと、いう屋根裏部屋へと足を踏み入れた。

そこには天城紫乃——もとい金色の魔女が以前使用していた道具が分厚い埃をかぶつて眠つていた。マスクをしていないと、すぐに気管がおかしくなりそうである。

リニアは非常に不快そうな表情で床に落ちている品々の埃を払い始めた。いつも彼女なら真つ先に鈴木聰太に押し付けるのだが、惜しくも彼女はじやんけんで敗北してしまつたのだ。鈴木が拒絶するということは、よっぽどの汚さと言う事である。

黙々と一人で作業を続けるリニア。ふと、彼女は幼い頃を思い出していた。父親に叱られ、よく屋根裏部屋に閉じ込められていた彼女にとつてこのように天井の低い場所はとても懐かしく感じるのだ。それ故、この部屋の掃除もそこまで苦労することはなかつた。普段怠けて

いるように見える彼女も、一度やると決めたら徹底的にするのが信条だ。

「それにしても、思つたよりはひどくないんだ……」

リニアは思わず口に出してしまつた。彼女が想像していたのはもつとクモの巣、ねずみにゴキブリといった害虫王国だつたからだ。この部屋は魔法が施されているおかげか、どうやら埃しかないようである。

リニアはひとまず埃の被つた物たちを拭き、階下のスペースへと避難させていく。一つ一つ雑巾で拭きあげていくため、自然と彼女は師匠のコレクションの数々を手に取つていった。古いレコードや食器などから、小銭やアクセサリー、他にも有名な作曲家の直筆サイン色紙や、豪華な装飾の施された古い文書といったあらゆるものが丁寧に箱の中におさめられていた。

「げつ……」

リニアは開けた蓋をすかさず閉めた。そして再びゆっくりと中を覗く。そこに入つていたのは骸骨だつた。状態からしておそらく本物ではないとは思われるが、やはりこんなものを見て心地が良いはずがない。

「……趣味悪つ」

師匠に悪態をつきながらその箱を拭きあげると、リニアはすぐ傍に置いてあつた長方形の鞄に目をとられた。旅行用かばんと思われるそれは、埃の積もり具合からして放置されて大分年月が経っているように思われる。

彼女が手に取つてみると、重さは感じられない。しかし代わりに中から何か異音のようなものが聞こえた。それは例えるなら、砂時計の砂が落ちて行くようなサラサラとした音だ。

リニアはしばらく悩んだ末、中を確認してみることにした。だが、チャックが鏽びついているのか全然動く気配がない。仕方なく彼女は持ち前の握力で、一気にそれを引っ張つた。

「ん？ 何だこれ」

鞄の中からは一着のドレスが出てきた。1960年代の金持ちが着ていたようなデザインである。リニアはじっくりとそのドレスを眺めた。天城が着るにはサイズがあわなそうだ。

「むしろ私にぴったりかも」

しばらく間、そのドレスを眺めていたリニアは何故かそのデザインが気に入つたようだ。幼い時、よくパーティにつれて行かれていた彼女は、毎回これと同じようなひらひらとした衣装を身にまとっていたからだ。

しかし、何故師匠はこんなドレスを持っていたのか。更には屋根裏部屋に放置していたのか。リニアは疑問に思つたが、おそらく彼女の事だ。しまつたまま忘れたのだろうということで解決したようである。

しばらくして彼女は再び作業を始めた。

「おーわりつ」

リニアは屋根裏部屋を拭き上げ、階下に降ろしていた品々を仕舞い直すと、大きく伸びをする。彼女自身もよく働いたと自負するほど、屋根裏部屋は清潔な空間へと様変わりしていた。そしてリニアは最後に、封印するかのように屋根裏部屋へと続く梯子を仕舞いこんだ。

「ふう……」

リニアは一息つくと、床に横たわっている鞄を見つめた。先ほどのドレスが入っている鞄だ。

何故かあのドレスを仕舞いこむのは躊躇われたのだ。久々にこのような服を見たせいか、あるいは故郷にこれと同じようなドレスを着ていた人がいたせいだらうか。

「ふむ。先生に聞いてみるしかないか」

リニアは複雑な表情で鞄を手に取ると居間へ向かつた。

＊＊

「くそつ」

鈴木聰太は苦々しい表情でため息を零した。見事、屋根裏部屋掃除じやんけんで勝利した彼に待つていたのは重労働、そして重労働の山だつた。女性に重たいものを持たせるのはどこか気が引け「俺が全部やる」と言つてしまつたからだ。

鈴木は時々、屋根裏部屋を恨めしげに見上げた。一人で掃除をしている方が幾分楽そうに見える。案の定、彼女は荷物を運び出した後ぱたりと降りてこなくなつた。

「……これで終わりか？」

鈴木は天城に指示された物を運び終えると、思わずその場に座り込んだ。居間に戻る気力すらなかつたのだ。

すると突然、彼の背後で何かが置かれた音がした。

「お前……もつと早く下りてきてくれれば……」

鈴木が振り返ると、そこにはリニアーと彼女の足元には古い旅行かばんが置かれていた。彼女の事だ、きっと好奇心に負けたのだろう。そう思った鈴木は自身の手元を見た。握られたのは箒とちりとり。

「ふむ……」

鈴木は自身の手元をしばらく眺めた後、その握っていたものを床に置いた。

「俺はよく働いたと思う」

まだ掃除する箇所は残されているのだろう、それでも彼はそれらを放棄することにした。

そもそも今日は鈴木にとつてまたとない『予定のない休日』だった。しかし、こういう日こそ携帯の電源を落としておくべきだつたのだ。そうすればこのような無料バイトに駆りだされることもなかつたのだが。

鈴木は自身の行動の浅はかさに改めてため息を零した。そして無邪気そうな顔で現れたりニアの傍に腰を落とす。

「何だそれ」

リニアは答えることなく彼の前に鞄を突きだした。

瞬間、物凄く形容し難い、かといつてとてもいい匂いとはいえないものが彼の鼻孔をくすぐる。

「すごい匂いだな……つておい、近づけるな!!」

「いやいや、それはもう慣れたからいいんだけど」

「俺は初めてだ!!」

リニアは不満げな顔で鞄を床に下ろした。そしてゆっくりとチャツクを空ける。鈴木は鼻を手で押さえながら鞄の中を覗いた。

彼はてっきりどんな呪いアイテムが入っているのかと思っていたが、それは些か拍子抜けの結果だつた。

「……ドレス、か」

すると突然リニアが彼の右手を掴み、強引にドレスに触れさせた。

「ちよつ……何すんだ!!」

「柔らかくない？」

罪悪感が全くない笑顔で言われると、鈴木も思わず自身の手元に集中した。

「確かに柔らかい……高級そうな生地だな」

鈴木は手を引っ込めると改めてリニアに問いかげた。

「屋根裏部屋にあつたのか？」

「うん。どう、きれいでしょ？」

リニアはドレスを身体に当てて一回転を披露した。彼女の身体に遅れてフリルが動く。まる

でどこかのパーティで踊っているようだ。

鈴木は思わずその姿に目を奪われ、思い出したように口を開いた。

「……昔のやつみたいだな」

「なんでこんなドレスがあるんだろう」

それは彼らにとつて当然の疑問だった。二人とも天城の服は普段着と幼稚園のエプロン姿しか見た事がない。このようなドレスを着ている姿も、ましてやこの格好で出かける先も思い浮かばなかつたのだ。

「……盗んだとか」

唐突に鈴木が口を開いた。

「何を？」

「このドレス」

「……先生が？」

「あの人ならやりそうだろ」

「いや、でもそれはいくらなんでも……」

そう言いつつも、リニアは完全に否定することはできなかつた。自身の欲しいものは必ず手に入れる。心のどこかでやりそだと思つてしまつたからだ。

「聞いてみるか」

「え……先生に？」

「俺も気になる」

鈴木はそう言つて、再び服に手を触れた。柔らかい生地……ナイロンではない。ミンク、毛皮、ムスタン？ 彼は思いつく限りの生地の名前を口にしたが、どうも明確な答えは得られそうになかつた。

「……これ、着てみようかな」

「え、これをか!?」

見る限り汚れてはなさそだが、ずっと放置されていたドレスだ。それでもリニアは真剣な

表情でこれを眺めていた。

「本当に着るのか？」

「見た感じ綺麗じやない。女王様みたいな気分になれるかも」

「……そこはお姫様じやなくていいのか」

「私は女王の方が好きだもん」

そう言いながら、リニアは上着に手をかける。

「ちよつ、待て待て待てつ！」

リニアは不思議そうな顔を鈴木に向ける。

「着替えるなら奥にいけよ！！」

「何で？」

そして当たり前のように上着を脱ぎ始めた。慌てて違う部屋に避難する鈴木。その首根っこをリニアは物凄い勢いで掴んだ。

「何をそんなに恥かしがつてるの？」

「は……なせ!!俺は真っ昼間から女の裸を見るほど変態じやない」

「あなたの妻の裸です。だからこれはノーカウントでOKよ」

「黙れ。とつとと、は……なせ！」

鈴木の首元には思いつきり服が食い込んでいた。このままでは意識が持たない。そう思った彼は観念してその場に留まる事にした。もちろん両目は閉じている。

「終わつたよ」

鈴木が目を開けると、ものの数分で彼女は見事にドレスを着こなしていた。

「すごいな……着るの大変そうに思えたけど」

「ああ、それなら小さい頃よくこういう服着てたから」

「へえ」

「それより後ろ閉めてくれない?」

リニアは鈴木に背を向け紐の部分を指さした。彼はしぶしぶといった表情でその紐に手を掛ける。

「あはは、なんかパーティー会場へ向かう夫婦みたい」

「……俺はパーティー会場へ向かう奥さんに仕える老執事気分だけどな」

「全く……口マンがないなー」

リニアが更に文句を言おうとした瞬間、彼らの背後で大きな物音がした。慌てて振り返る二人の目に映つたのは、顔なじみの少女——九条奏だった。彼女があつと息を飲むや否や、少女の顔は明らかに怒りを表していく。

「……掃除もしないで何してるので？」

そして奏は床に散らかつた衣類を眺めると、その目をゆっくりと鈴木に移動させた。

「……」

「か、奏？」

「……一体何があつたんだろう」

「いや、これは別に……!!」

「……何で脱いだ服があるんだろう」

自身に問い合わせるような口调でじつと鈴木を見つめる奏。彼にとつては今までにないほどの恐怖を感じていた。

「か、奏!! 今は服を着てるだろう!! ドレス!!」

「ドレス……これは一体何があつたんだろう」

「……ははは、俺にも何が何だか」

一から丁寧に話さなければ、この少女はこの場から動かないのだろう。そう思った鈴木は屋根裏部屋からの経緯を説明し始めた。

結局、奏は天城が帰宅するまで納得しなかつたのだが。

「確かにあのドレスは私の持ち物だよ、奏ちゃん。どうせリニアが好奇心で勝手に着ようと
思つただけでしょ」

そういうつて天城は奏を宥めるが、依然として少女は鈴木に訝しげな視線を向けていた。

「それにしても……一体どうしてあの服が」

天城は廊下の隅から顔だけ出してているリニアを呼びつけた。彼女は畏縮しながらも天城の前に
に出るが、

「サラー……」

「え？」

思わず天城の口から零れた名前。だがすぐに彼女は、はつとして首を振った。

「つたく……余計なものを持ち出して」

「ここに入っていたんですよ」

ため息を零す天城にリニアは例の鞄を突きだした。

「この鞄……うわあ、懐かしい。そうか、屋根裏にしまつてあつたのか」

「でも先生、このドレス誰のですか？先生のものとは思えないんだけど……」

「ああ、それは私のものではない。今は一応、私の所有物だけど……プレゼントって言つた方が早いかな」

「プレゼント？」

首を傾げるリニア。その姿を天城は静かに眺めると、ゆっくりと口を開いた。

「そのドレスの持ち主はサラ・イベリノ。お前の母親だ」

一時の静寂。そして鈴木とリニアは揃つてそのドレスを見つめた。

そして、

「「ええ!?」」

突然の驚嘆の声に思わず天城は耳を塞いだ。しかしリニアの勢いは止まらない。

「ちよつと待つてよ、先生!!これ……本当に私のお母さんの……!?」

「そうだよ」

「でも……!!何で先生がそんなものを」

「それは……」

リニアの質問に天城は腕を組んだまま天井を見上げた。

「忘れた。あまりにも昔だからな」

「ええ……そんな……」

がくりと肩を落とす彼女に対し、天城は話を逸らすように掃除を促した。

「ほら、早く終わらせるわよ。リニアもどつと着替えて来なさい」

「……はーい」

そう言つて、リニアは背中に手を伸ばす。

瞬間、奏が鈴木を追い出すように手を引いた。

「出てつて」

「あ、そうか。そうだな」

鈴木は奏の言う通り、ひとり、奥の部屋で待機することにした。

彼はひとりきりになると、改めて今日を冷静に見る事ができた。

「……俺は本当に何をしているんだ」

早く終わらせて帰ろう。そう思いながら、彼は深いため息を零した。

「それでも……母親の服か」

気づくと鈴木は先ほどの会話を思い出していた。

「そういえばあいつ、前に母親は亡くなつたって言つてたな。父親とは仲が悪いようだし」

ふと、彼は思った。

もしかすると、彼女は服に残つた僅かな母親の匂いを感じて、「

「んなわけないか」

**

「どう？キルヘン。素敵なドレスでしよう」

遠い記憶の思い出だ。顔はおぼろげだが、声だけははつきりと覚えている。

天城は椅子に座り、窓からの景色を眺めながら、先ほどのドレスを思い出していった。

「キルヘン、キルヘン。私の名前をそんな風に連呼したやつはそういないよ」

気づくと彼女の口元には穏やかな笑みが浮かんでいた。それが何十年前の出来事かも今では正確に思いだす事ができない。しかし天城にとつて、年月などはさほど重要ではなかつた。あの女性が天城にドレス姿を見せた事、それだけで充分彼女にとつては素敵な思い出となつていた。

「本当に母親とそつくり」

天城は窓ガラスに映る姿を見て思わず口に出した。彼女の後ろで楽しげに談笑するリニア。先ほどの記憶で微笑んでいた顔に、どこか似ている気がしたのだ。それもそのはず、あれはリニアの母親だ。そして彼女は天城にとつて数少ない友人でもあつた。

＊＊

それは昔、金色の魔女が完璧に肉体を手に入れる前の話だ。

キルヘン・スイートという魂が幼い少女、天城紫乃の肉体に憑依したばかりの頃。以前から行われていた研究で、金色の魔女の魂の波長と一致する人間はいたが、完全に成功したとはいえないのが現状だった。

そんな彼女と天城紫乃という少女の実験、ひとまず拒否反応が起ころる事はなく、身体に慣れるためにと彼女は様々な場所に赴く事にした。

そして偶然、協会内でも発言力のあるイベリン家を訪問した事があつた。協会内の派閥事情

を知りたいと思つた彼女は、気まぐれでその家に立ち寄る。いつも彼女を出迎えてくれたのはサラ・イベリンだつた。彼女は温室育ちのお嬢様にしては活発な性格をしており、二人きりになるといつも我儘を言う、とても純粹な心の持ち主だつた。

天城はぼんやりと目の前の椅子を見る。そこには先ほど彼女の娘がかけていつたドレスがあつた。長い年月を経ても、決して色が変わることはなく当時の面影をありありと残している。しかし何故このドレスが屋根裏部屋にあつたのか、天城は未だに思い出せずにいた。ここにある荷物は確かに天城紫乃という身体に定着してから持ち込んだものしかないはずである。

「サラ、時は流れるものだな」

天城は今は亡き友人に向け、穏やかな笑みを浮かべた。そして天城はリニアを見つめる。

「私たちの希望、お前のかわいい娘」

サラはリニアを産んで間もなく亡くなつた。彼女が亡くなつた後、彼女の夫は娘を遠ざけたと天城は聞いていた。しかし金色の魔女自身も当時、天城紫乃という人間の身体を媒介に、本当の自分の身体を再生すると言う大実験のため彼女の娘の面倒を見るることは難しかつたの

だ。

サラ・イベリン。金色の魔女が唯一その死を悲しんだという女性。そして彼女の人生に大きな影響を与えた女性だ。彼女と出会わなければ、この天城紫乃という人間が今頃何をやっていたのかわからないと言つても過言ではない。

「少なくとも、幼稚園の先生にはなつてなかつたな」

天城は目の前のドレスを見つめる。まるでそこには誰かが座つているように思えた。

—私はまだ生きてるよ。この魂が尽きるまで生きる。

そう天城は決意した。少なくともサラの願い通りリニアの面倒は見るつもりでいる。

「まあ、もう少し大人しくしてくれないと有り難いんだけどね」

天城はため息を零して居間の方を横目で見た。また何か問題が起こったのか、真っ赤な顔でリニアは鈴木を追いかけていた。

「やれやれ」

想い出に浸るのはここまでにしよう、そう思つた天城はこれからやるべき事を頭の中で整理し始めた。そして弟子の名前を呼ぶ。

「リニア、掃除は終わったの？」

「はい」

平然とした表情で頷くリニア。もう自分の仕事はないと確信しているようだ。天城は椅子に掛けられたドレスを指さす。

「あのドレス」

「ああ、もう一回屋根裏部屋にしまつときますか？」

「ふむ。どうしようか」

相談するような口ぶりだが、リニアはわかっていた。自分が何を言おうと結局、彼女は全部勝手にするだろうということを。そして実際、天城はそうだった。

「いや、娘の意見ぐらいは聞いておこうと思つたんだけど……」

しばらく考えた後、再び天城は例のドレスを指さした。

「リニア」

「はい」

「あのドレス、持つていって」

天城の言葉に口を空けたまま固まるリニア。彼女は繰り返すように告げた。

「あげる。あなたに」

「……本当ですか？」

リニアは恐る恐る、ドレスが掛けられた椅子に近づいた。

「どうせあなたの母親のものなんだから。それに屋根裏部屋で筆筒の肥やしになっているよ
りマシでしょ」

リニアはまじまじとドレスを眺め、ゆっくりと持ち上げた。

「私の……母親の……」

サラ一の遺品は全て夫が取りあげてしまったので、彼女は自身の母親に関するものを見たの

は今日が初めてだつた。そしてそれを自身が所有するのも初めてだ。リニアは大切そうにドレスを抱きしめ、天城に向かい、深々と頭を下げた。

「ありがとうございます……!! 先生、私大事にする!!」

そう言つてリニアは嬉しそうな顔で居間の方へと戻つていった。その後姿を見て、再び天城の口元は緩む。それはいつか、遠い記憶に見た光景と重なつたのである。

**

居間に戻つたりニアは鈴木の元へ駆けよると、持つていたドレスを楽しげに広げた。

「これ、先生が私にくれたの!!」

「先生が……!?」

鈴木はその言葉が信じられず、思わず窓を見る。

「明日は大雪……いや、台風」

そこで天城の部屋の扉が空いているのに気付いた彼は、急いで咳払いをする。

しかし意外だという表情は隠せず、鈴木はそつと彼女の部屋を覗いた。すると天城は一人、目を閉じたまま小さく笑みを零している。

「……こわっ」

鈴木は身を強張らせながら居間へと戻った。

「しかしリニア、そのドレスどうするんだ？」

「どうするつて？」

「それを着て行くところもないだろ。この辺じや、盛大なパーティーを行う場所もないし」

鈴木の指摘を受け、リニアもドレスを持ったまま頭を抱えた。このまま篠笥にしまつておいたらそれこそ生地が傷んでしまうに違いないのだ。

「そのまま鞄にしまつておいた方がいいんじゃないのか？」

何か魔法が施されているのか、長い間ドレスを劣化から護り続けてくれた鞄。リニアはそれしか方法はないのかと納得のいかない表情で鞄を拾い上げた。

しかし次の瞬間、彼女は何かを考えついたかのように顔を上げる。

「そうだ、聰太!!」

「ん？」

「ここでパーティー開けばいいんだよ!!」

「パーティー?」

突拍子のない発言に思わず聞き返す鈴木。そんな彼の両手を握つて、再び彼女は提案する。

「舞踏会を開くの!!」

「誰と」

「聰太と私の二人きりで!!」

あからさまに嫌そうな顔を浮かべる鈴木に対し、リニアは鞄を持ちあげる。彼が拒否すれば

それが物凄い勢いで飛んでくるだろう。

「リニア、落ち着こう。ひとまず話し合いだ」

「舞踏会について？」

ニコリと笑うリニア。今はその笑顔が鈴木にとつては恐ろしかった。

「ふ、舞踏会って言つたらダンスだろ？俺、踊れないぞ？」

「大丈夫、大丈夫。私が教えるから」

「そういう問題じやなくて」

「うん、このドレスならワルツかな。それともメヌエットの方がフリルも映えるかな」

リニアは鈴木の様子を気にすることなく、楽しげに計画を立てて行く。彼女の口から次々に出てくるパーティ用語に鈴木は驚きを隠せなかつた。そして本当に彼女は上流階級の人間なのだと改めて思い知らされる。

「……やるとしたら、日曜にしてくれ」

「うん!!じゃあ今日の夕方ね」

「は?」

確かに鈴木は日曜といった。そして奇しくも今日は日曜日である。すかさず文句を言おうとした鈴木だったが、その前に彼女の右腕が再び上がった。

「……わかつたよ」

「それじや、夕方までに特訓よ!!」

「と、特訓!?」

リニアはドレスを自室にしまって再び居間へと戻ってきた。

「ひとまず私が踊るから傍でしつかり見といてね」

「まじかよ……」

「お嬢様の本気を見ときなさい!!」

突如始まった本格的なダンスレッスンに戸惑いを見せる鈴木。そんな彼を前にリニアは意氣

揚々として踊り出した。

リニアは長い廊下を使い、優雅に足を進める。無駄のない足さばきにターン。ジーパンに長袖と言う格好にも関わらず、本当にドレスを纏っているかのように美しい踊りを披露した。その踊りに思わず息を飲んだ鈴木は、彼女が踊り終えた後も開いた口が塞がらなかつた。

「どうだつた？」

「え？」

「感想のひとつくらい頂戴よ」

「あ、ああ……上手だな」

「でしょ？」

満足げな様子で胸を張るリニア。しかし、ここまで完璧な踊りを見せられてしまうと、鈴木の気が引けてしまふのは当然だつた。

「やっぱり俺には……」

「ほら、聰太立つて!! 基本的な事だけ押さえとけば、後は私がエスコートするから大丈夫

だつて!!」

時刻はお昼すぎ。二時間以上はレッスンすることが確定だつた。鈴木はリニアに手を引かれ
て渋々と立ちあがる。

＊＊

彼女は夢を見た。それは記憶に基づいて形成される空間、場所、想い出。

その家は邸宅と呼べるほど大きな家だつた。一代でここまで資産を持つことはめつたに有
り得ない。きっと代々からの功績ゆえの結果なのだろう。

彼女は—キルヘン・スイートは今日もこの邸宅に遊びに来ていた。まるで母親のように世界
の色々な事について教えてくれる女性。しかし彼女は病弱なので外を出歩くことは敵わない。
それ故キルヘンが毎日遊びに行くしかなかつたのだ。時刻は夜、それはまるで秘密の逢瀬の
ようだつた。

「へえ、そんなことがあつたんだ」

サラ一は楽しそうに笑みを浮かべる。そして自由に外の世界を見て回る友人を羨ましそうに眺めた。その様子は駄々を捏ねる子供のようで非常に愛らしい。

「そんなに羨ましいなら、旦那に連れて行つてもらえばいいじやないか」

「無理よ、あの人は絶対に許可しないわ」

サラ一は拗ねるように頬を膨らませた。彼女の夫は無愛想で冷淡な印象を抱かせる男であり、事実キルヘンは彼をあまり好いていなかつた。自身の野望のためなら彼女を見捨てることも厭わない、そんな風にさえ思えてしまうのだ。

「休養地とかにも行かせてくれないのか？」

「そうよ！大人しく家にいなさいって」

活発な性格に反して、思うように身体を動かせないのは苦痛に違ひない。それでも彼女は笑顔を失う事はなかつた。キルヘンはそんな彼女が嫌いではなかつた。最初こそ、お高くとまつたお嬢様という印象だつたが、いつのまにか彼女との仲は深まつていたのだ。

「そういえばキルヘン」

「ん？」

「メイド達が話していたんだけど、この近くで盛大なパーティーが開かれるんだって」

「へえ、パーティー。サラ一が好きそうね」

「うん。でもきつと私はいけないわ」

そう言つてサラ一は瞳を落とす。キルヘンはそんな彼女の姿を見るとやや口調を強めて、彼女の夫を非難した。外見は子供だが、中身は違う。そして、すつと彼女は冷酷な瞳を宿した。

「私が殺してやろうか」

「キルヘン!! それは駄目よ！」

すかさずサラ一は声をあげた。彼女は夫に不満はあるども、ちゃんとした愛情も持つてているのである。

「彼が悪いんじやないの。私の身体が弱いから。まあでも、これも家系だから仕方ないんだけどね。私の母も病弱だったから」

「家系……ね」

そんなことあるもんか、と内心では思っていたキルヘンだったが、すぐにその疑問は頭から消した。

「そういえば、あの男は婿養子なのか？」

「ええ、名字も母国のものを使用してるわ」

サラ・イベリンの夫は協会内でも有名な手腕家の人だ。イベリン家には彼女しかおらず、父親が彼の名前を聞いてイベリン家に招いたのである。

「それで？本当にパーティーにはいかないのか？」

「行きたくても行けないのよ!! あーあ、私もお外で遊びたいのに」

そういうて、サラは枕に顔を埋めて足をばたつかせた。

「……よくそれで我慢できるな」

毎回このように駄々をこねる様子を見ていると、キルヘンも自然と窮屈な気持ちになつていった。しかし、サラは彼女の問い合わせに穏やかな微笑を称えて答える。

「あの人とても優しいのよ、私の面倒も見てくれて」

「婿養子だからな。追い出されないように必死なんじやないか」

「あら、そのために自分のプライドを壊してくれたなら、その分私は愛情を感じるわよ」
キルヘンが悪態をつくも、サラードは華麗にそれを受け流していく。降参したとばかりに彼女
は深いため息を零した。

「わかつたよ、旦那自慢はやめてくれ」

「ふふふ……ちょっと恥ずかしいわね」

サラードは顔を赤らめて微笑んだ。しかし、その目はどこか遠くを見ている様にも感じられる。
キルヘンはそんな横顔をじっと見つめていた。そして彼女は小さく、何か呪文のような言葉
を紡いだ。

「え？」

突然、サラードの身体から光の粒のようなものが溢れだした。彼女は奇妙な現象に戸惑いの色
を隠せずにいたが、そんな彼女の手をキルヘンは優しく握った。

「特別サービスだよ。パーティに行くにはドレスを買わないと。ほら、外に行くよ」

「え……ちょっと待つて、キルヘン!! 勝手に消えたらみんなが心配するわ」

「もう……一晩くらいシンデレラになつてみたらいいのに」

幼い少女の誘惑にサラード勝てなかつた。そして彼女が領き返すや否や、二人は大きな窓を開けて飛び降りた。通常なら真っ逆さまに落下するはずだが、彼らは宙に浮いている。

「キ、キルヘン!! 空、私たち空を飛んでるわ……!!」

「そうだよ、思い通り飛んでいいよ」

続けざまに起ころる不思議な現象に、思わずサラード息を飲んだ。対するキルヘンは、彼女の手を取つて一気に天に向かつて急上昇する。

「あれ……思つたより寒くない?」

冬の夜ということもあり零度近いと思つていたが、サラード体感では殆ど室内にいる温度と変わらない様に思えた。

「色々と小細工が仕掛けあるからね。十二時までなら平氣だよ」

「本当にシンデレラになつた気分だわ」

得意げな顔のキルヘンに、思わずサラーレは冗談を交わした。

「さて、どこに行く？近所の百貨店じや、すぐにばれるだろうから……他の国にでも行つてみる？とりあえず大西洋渡つてアメリカとか」

「いいでもいいわ。どこに行つてもきっと楽しいに違いないもの」

サラーレの瞳に映る景色は輝いていた。こんなに高いところから建物を見下ろしたこともない。遠くに広がる山々でさえ、彼女は一度も見た事がなかつた。彼女の目に映る全てが彼女にとっては本当に初めての世界だつたのだ。

「うん……それじゃあ、ひとまず海を渡つてみよう！」

そう言うと、キルヘンは彼女の手をしつかりと掴んだ。そして地上の人々からすればまるで流れ星のようにも感じる速さで、彼らは冬空の下を飛んでいった。

巨大なショッピングモール内。サラードはこんなにも大勢の人ごみの中に行くのは初めてで、辺りをきよろきよろと見回しながら店内を歩いていた。それ違う人との距離も掴みづらく、キルヘンに手を引かれなければ、すぐに他人とぶつかってしまうだろう。端から見たら少女に手を引かれる母親というおかしな光景に違いない。

「ねえ、キルヘン。これは？これは何なの？」

「それは電化製品だよ。ドレスとは関係ないでしょ？」

「これは？」

「それは文房具」

「じゃあ、あそこに置かれているのは？」

次から次へと好奇心を飛ばしていくサラードにキルヘンも楽しげに笑いながら、ひとつひとつ答えていった。

「ほら、服売り場は上だから。いくよ」

そう言つてキルヘンはサラードの手を引っ張る。すると突然、店内放送が流れた。彼女はびくりと肩を震わせて天井を見上げる。

「サラ……天井に人はいないからね」

「う、うん」

しばらくすると、エスカレーターの前に出た。キルヘンは後ろを振り返る。案の定、サラは物珍しげに自動で動く階段に驚いて固まっていた。

「エスカレーター。知つてゐるでしょ？」

「し、知つてゐるけど。実物は初めてだわ」

困惑した声を上げるサラだが、やはり彼女の根本は活発な性格だということなのだろう。 サラーは恐る恐る足を踏み入れた。そして自動で自身の身体が上がっていく事に感動を覚える。

サラ・イベリンにとつて家の外のものは全てが初めての体験・初めての光景なのだ。そしてそのはしやぎ様は、まるで地球規模の遊園地にでも來て いる様なものだった。

「あ、馬鹿。そんなに頭出すな」

キルヘンはエスカレーターの取つ手から、思い切り身を乗り出して いた彼女の髪を急いで引つ張った。

「わつ……え、何でだめなの？」

キルヘンは無言で注意書きを指さす。

「……頭が挟まってしまうのね」

納得した顔で領くサラードキルヘンは落ち着かせるように声をかけた。

「初めて外に出てはしやぐのはわかるけど、お転婆がすぎるぞ。万が一、家出中に大けがでもしたらどうするんだ」

窘めるように注意するキルヘンだが、一方のサラードは家出という言葉に反応して嬉しそうな顔を浮かべた。

「そう。私、今、家出しているのね？ 素敵な冒険だわ!!」

冒険……ショッピングモールごときで大きさだと思ったが、キルヘンは何も言わずには彼女へ笑いかけた。

「そう、これは冒険だ。ならとつと目的地にたどり着こうじゃないか」

こんな調子で談笑をしていると、二人はあつという間にドレス売り場へと辿りついた。そこ

は今までの階とは違い、どこの店舗も煌びやかな装飾を施したドレスがずらりと並んでいる。

「ほら、ここから好きなドレスを選ぶんだ」

「わあ……」

思わず感嘆の声を上げるサラ。おそらく彼女の家の資産ではドレスひとつ買つても全く気付かれる事はないだろう。仮にこのドレスが見つかたとしても、メイドに頼んだといえれば怪しまれる心配もなかつた。

サラ一は店頭に掛けられたドレスをまじまじと眺めているが、そのペースではとっくに約束の時間をこえてしまいそうだ。そこでキルヘンは近くにいた店員に声をかけると、

「すみません。私のお姉ちゃんが大事なパーティーに行くんですけど、どれが似合うかわからぬみたいなんです」

「まあ、お姉さん思いの妹さんね」

そう言うと、店員はくすくすと笑いながらサラの元へと駆け寄つた。店員の案内を受ける彼女の後ろをキルヘンもついていく。万が一、容体が急変するかも知れないと心配になつたからだ。

サラーは店員に付き添われてたくさんのドレスを見た。その派手な装飾に思わず目を奪われているが、おそらく彼女は知らないのだろう。それらのドレスより遙かに高価な品を普段着としていることに。

サラーは楽しげな表情で次々とドレスを自分の身体に当てて鏡を見ている。疲れなど全く感じていない。それこそ魔法がかかっているかのように、彼女は普通の健康な女性に感じられる。

「キルヘン」

彼女は後ろで付き添ってくれている友人に声をかけた。

「どう？」

「……うん、綺麗だ」

「あ!!あれも着てみたい!!」

年相応、いや実年齢よりも幼く感じられる行動にキルヘンは思わず笑みを零す。あと数時間。それでも彼女は籠の中に囚われている友人の笑顔を、美しい想い出を作つてあげたかったのだ。

「じゃーんっ !!」

サラ一は勢いよく試着室のカーテンを開けると、本當にお姫様になつたかのよう美しイターンを披露した。

「たくさん着てみて気に入つたのがあれば買う !! それがショッピングと言うんでしよう ?」
テレビからの知識だらうか、彼女はまるでどこから引用してきた様な口調でキルヘンに問いかける。

「うん、その意氣だ !!」

その後もサラ一は様々な色のドレスを試着する。気づくと彼女よりも店員の方に疲れが出てきているようだつた。

「あの……お嬢ちゃん」

疲れの見える顔で店員はキルヘンへと声をかけた。

「もう彼女に合うドレスはないんだけど……」

「そうなんですか。サラ一、そろそろ決まつた?」

キルヘンは試着室越しに彼女へと問いかける。しかし返つてくるのは返事の代わりに、唸る声だった。どうやら真剣にドレスを選んでるようだ。しばらくした後、再び試着室のカーテンが開いた。

「どう? これが最後のドレスよ!」

サラ一はくるくると鏡の前で回る。奥には今まで彼女が試着したドレスがずらりと掛けられていた。

「うーん。どれも素敵なんだけど……全部買うのはさすがに困るわよね」

「金銭面はともかく、パーティーに着て行くのは一着だぞ」

キルヘンの言葉に、更に彼女は頭を悩ませた。

「どうしよう、キルヘン。どれがいいかな」

「それは本人の好みだもの。強いて言うなら、その最後のドレスでいいんじゃない?」

友人の意見にサラ一は再び考える。そして、にこりと笑いながら、

「うん、これにするわ。キルヘンも気に入ってるみたいだし!!」

彼女が購入を決めるに、傍に立っていた女性もやつと安堵の息をついた。彼らも長い事、婦人の買い物に付き合わされたものである。

そしてドレスの会計を済ませると、キルヘンはサラーへと振り返った。

「靴はどうする？」

「靴？ それなら家にもあるけど」

「それでもせつかくなんだからパーティ用に買っておきなよ」

彼女の提案にサラーは二つ返事で頷いた。

その後も彼らはネックレスに鞄、香水などパーティに出るためのあらゆる小物を片つ端から購入していく。ひとつひとつ丁寧に吟味する。あつという間に楽しい時間は過ぎて行つたのだ。

「あ、キルヘン、あと二時間しかないわ」

「本當だ」

彼らは両手に下がつた紙袋を満足げに見下ろし、ショッピングモールを後にした。

「これでもういつでもパーティーに行けるわ」

そう言つてサラームはキルヘンの手を握つた。同時に二人の身体は宙に浮かびあがる。そして来た時と同じように彼らは海を通り過ぎ、山を越えイベリン家へと戻つた。

「ありがとう、キルヘン。私もシンデレラになれたかしら？」

「サラーム、シンデレラはショッピングなんてしてないよ」

互いに冗談を言つて笑い合う。とても穏やかな時間が流れていった。

「綺麗ね」

ふと、サラームは窓の外を眺めた。そこにあるのは満天の星空の海だ。どこか物憂げな表情で星を見上げる彼女を見て、キルヘンはある策を思いついた。

そして彼女が指をパチンと鳴らすと同時に、突然サラームの服が変わった。それは先ほど彼女が購入したドレスだ。更に指をもう一度鳴らすと、今度は靴が現れた。キルヘンは先ほど購入した品々をあつという間に彼女の身体に実現させた。

するとキルヘンの目の前には、今からパーティーに出かけてもおかしくないほど準備万端なサラームがいた。彼女は満面の笑みで部屋の中をくるくると回る。その様子をキルヘンは何も

言わずにそつと眺めていた。

**

「そういえばパーティーはいつ行われるんだ？」

準備は整った。後は会場へ向かえればいいだけだ。キルヘンは踊り疲れたのか、ベッドの横に腰掛けているサラへと問い合わせた。すると彼女は思いもよらない返事をする。

「パーティーなら今してんじゃない」

「え？」

「会場はここ」

満足げな顔で床を指さすサラ。そんな彼女をキルヘンは複雑な表情で見ていた。

「キルヘン？」

「……」が会場なら、とつとと踊る相手を探して「

「ええ……でもあの人の所に行つて何を言えば……叱られてしまうわ」

「じゃあ君は、一切踊らずにパーティーを終える気がい？」

キルヘンはニヤリと笑い、部屋の入口を開いた。

「ほら、行け。あいつは一階にいる。この時間ならまだ起きているだろう」

「……うん!!」

サラードは両手で決心すると、キルヘンに大きく手を振りながらドアを閉めた。廊下を歩く音が遠のいていく。

キルヘンはやつと一段落をしたと思い、彼女のベッドへと腰を掛ける。するとどつと疲れが出てきたのか、体が急に重たく感じた。キルヘンは今、憑依をしている状態だ。つまり依代となる幼い天城の身体はそろそろ限界に近かつた。

「私にはあいつの病気を治すことだつてできるのにな……」

キルヘンは静かに愚痴を零した。何度も治せると伝えて、サラードが頑なにそれを拒むのだ

から仕方がない。理由を聞いても上手くはぐらかされてしまうのだ。

「サラ一、今夜は存分に楽しめ」

暗い考えをするのはやめた。キルヘンはただ、友人が人生で最高に素敵な時間を送れる事を願つたのだ。

そつと部屋の扉が開かれる。その音を聞き、キルヘンの意識は覚醒する。いつのまにか彼女はサラ一のベッドの上で寝てしまつていたようだ。

「サラ一……」

気がつくと、サラ一はキルヘンのすぐそばで立ち尽くしていた。そして彼女は友人の隣につと腰を下ろす。一言も発しない彼女の様子にキルヘンは思わず身を乗り出した。

「どうした？ 旦那と踊つて来たんじゃないのか？ それとも叱られたのか？」

キルヘンが言い終わる前に、サラ―は彼女の身体を強く抱きしめた。

「楽しかつたわ!!」

「ほ……本当か?」

「ええ!! キルヘンも来てくれたらよかつたのに!! あの人もメイドも、みんな驚いていたわ!!」

サラ―は未だ興奮が収まらないのか、矢継ぎ早に次々と出来事を述べていった。

「このドレスはどうしたんだ? って聞かれたから、ハンスには悪いけど彼に買ってもらつたことにしちやつた。後で謝つておかないといけないわね」

ふふふと楽しげに笑うサラ―。まるで無邪気な子供のような笑顔をしていた。

「あー!! 楽しかつた!! 色んな人が踊つてて、素敵な音楽も流れてて……」

「お前も踊つたのか?」

「ええ、踊つたわ!! ワルツ……いえ、ポルカだつたかしら」

サラ一はベッドから降りると、先ほど踊つたのであろう踊りを一通り彼女の前で披露した。伴奏はサラ一の鼻歌だ。それに合わせて彼女はターンをする。

「どう？ 幼い頃、母親に習つたの」

「へえ」

キルヘンは依然として踊り続けるサラ一の姿をじっと眺める。すると彼女は、ひとり傍観している友人の手をとつた。

「踊ろう、キルヘン!!」

「え？」

「大丈夫、私が教えるから!!」

自慢げに胸を張るサラ一だったが、キルヘンの身体は一般的な少女と変わらない。どうしても身長差がでてしまうのだつた。

「いや、やっぱりこの身体じゃダンスは無理だよ」

「私がエスコートするわ!!」

そういつてサラードは彼女の腕を引っ張った。そして先ほどよりわずかに腰を落とすと、軽快なステップと共に二人は歩き出した。

何度かバランスを崩しそうになるキルヘンを上手くサラードが支える。そしてサラードが方向を変えるに従い、キルヘンの身体も移動する。それはまるで本当に手を引かれているのと同じだった。

「どう？ 楽しいでしょ」

「……そうだな」

「ねえ、キルヘン」

彼女は踊りながら、友人へと声をかけた。

「今回の素敵な冒険の代金は、これを最後のパーティにするつてことでいいかしら？」

「え？」

思わず足を止めそうになつたキルヘンだが、二人の手は未だ結ばれている。サラードが止まらない限り、彼女の身体もそれに引っ張られるように踊り続けなければいけなかつた。

「だから今日が人生で最初の最後のパーティー、あなたとの踊りが最後の踊りよ」

「そんな……!!」

「これくらいじやないと割に合わないもの」

サラ一は笑う。寂しさはあつても、決して後悔はないといった顔だ。そんな彼女の表情にキルヘンはもう何も言い返すことができなかつた。

「このドレスもこれつきりになつてしまふのは残念だけれど……よかつたら、キルヘンが持つていてくれない？」

「……それはサラ一のだ」

「あ、じやあ貸すことにしておくわ。いつか私が元気になつて、パーティーに行けるようになつたら返してちようだい」

先ほどと言つてゐる事が違う。そう言いかけた彼女の口を塞ぐように、サラ一は笑いかけた。十二時まで残り数秒。彼らは鐘が鳴るまで踊り続けた。

「あ……」

壁に掛けられた柱時計が重たい音を鳴らす。十二時になつてしまつた。それと同時にサラーヌの身体から再び光粒が漏れだす。しかし今度の光はまるで消え入るよう霧散していった。

「シンデレラはもう帰る時間ね」

サラーヌがそう呟くと、彼女の動きは突然鈍くなり始めた。そしてついに彼女の足は止まってしまう。限界か、そう思つたキルヘンはサラーヌをベッドへと誘導した。ドレスを脱ぐ体力も残つていないサラーヌを見て、彼女は先ほどと同じように指を鳴らす。瞬く間に、ドレスは床に落ち彼女の服は元の姿へと戻つた。

「もう横になる時間だな。今日はここまでだ」

「そうね……あー!! 楽しかった!!」

「……私も楽しかった」

「ふふ、良かつた」

その後も、体力的には限界だがまだまだ興奮が冷めやらないのか、サラーヌはベッドの横に座るキルヘンに夢の様な時間を話し続ける。しばらくして、完全に彼女が眠つた事を確認するとキルヘンは彼女が着ていたドレスを手に取り、静かにため息を零した。

「貸してもらつてもなあ……」

キルヘンは規則正しい寝息を立ててているサラ一に一度だけ振り返つた。

「いつか、必ず返しに行くよ」

そう言つて、彼女はゆっくりと部屋の窓を開けた。

「おやすみ、サラー」

穏やかな笑みを浮かべると、彼女はひとり窓の外へ飛び降りる。そして決して違う事のない約束を胸に抱いて、彼女は夜の空を過ぎ去つていった。

「うう……」「

天城紫乃はゆっくりと瞼を開けた。どうやら机に座つたまま、すっかり寝こけてしまつたよ

うである。口元についた涎からして、だいぶ気持ちよく寝ていたらしい。

「あら、もう夕方」

近くの時計は午後五時を指していた。天城は自らの惰性に呆れて苦笑いを浮かべると、大きく伸びをして立ちあがつた。

「あのドレス……結局私が持つてるままじやない」

久しぶりに懐かしい夢を見てしまつた。そう思つた天城は懐古感に囚われる前に、部屋を後にする。

「奏ちゃん？ 鈴木くん？ リニア？」

居間に戻つたが誰の姿も見当たらなかつた。買い物にでも出かけたのかと思つた天城だが、よく耳を澄ますと外の方で何やら声が聞こえた。まるで何かに誘われるかのように、彼女の足は庭先へと向かう。

夕日が庭の芝生を照らし、表面の緑が光を反射する。それは自然が作り出したシャンデリアの様に神秘的な空間を作り出していた。リニア・イ・ベリンはドレスに着替え、じつと相手の登場を待っている。

「……遅かったわね、聰太」

「そりやあ、スース取りに一回帰らされたからな」

鈴木は文句を零すが、今の彼女の耳にはまるで届いてないようだつた。

「素敵なお紳士様、私と一曲踊つて下さいませんか？」

「……普通こういうのは男から誘うものだろ」

しかし、この方が彼女らしいのかもしれない。そう思つた鈴木はゆっくりと彼女の手に自分の手を置いた。リニアはもう一度、確かめるように訊ねる。

「私と踊つて下さいますか？」

「はい」

それを合図に二人は強く手を握りしめた。

「私がエスコートするわ」

そう言つてリニアは、勢いよく彼の腕を引っ張つた。そして軽くステップを踏み始める。鈴木も彼女に合わせるように動き始めた。

「実際やつてみると、結構大変だな」

「このステップ踏み終わつたら後ろに移動するよ、私とリズム合わせて」

リニアの指示の下、鈴木は足を動かす。

しばらくして結構慣れてきたと思つた頃、ふと、彼の足がステップを踏み間違えた。同時にリニアのドレスの裾を踏んでしまい、靴の跡がついてしまう。

「わ、悪い!!」

「大丈夫。どうせ初めてなんだから、リズムに乗れているだけでもすごいよ」

そう言つてリニアは静かに笑う。彼女は決して踊りを止めることがなく、彼の手を離す事もなかつた。

気づくと、いつのまにか夕日は沈み、夜の月が彼らを照らしていた。月光が作りだす二つの影は幾重にも広がり、まるで本当にパーティーが行われているかのようである。

「昨日は何していたの？」

リニアは踊りながら鈴木へと訊ねた。

「昨日？ 昨日はバイトだったな」

彼も少しあは余裕が出てきたのか、昨日の記憶を辿りながら踊る。

「そんでバイト終わって、映画見ながらビール飲んでた」

「私の事は考えてくれたりはしなかつたの？」

「え？ ああ、それなら毎日考へていて安心していただいていいですよ」

「まあ、ありがとうございます。今まで聞いた言葉の中で一番ですよ」

軽い冗談を交えながら二人は踊り続ける。音楽など一切かかっていないくとも彼らの頭の中ではちゃんと流れているのだろう。二人のリズムは乱れることはなかつた。

「明日の予定は？」

「明日はバイトですね」

「もう……最近私のこと構つてくれてませんね。遊んでもくれないし」

「そうですか？まあ食事の用意をして下さるなら遊ぶ時間も増えると思いますけど」

「あら、それなら仕方ないですわ。食事は大切ですもの」

「全く……本当に正直者なお姫様ですね」

そう言つて鈴木は穏やかに笑つた。

会話が途切れ、鈴木は踊りに集中する。ふと、頭の中を多くの人の顔が流れた。それは死んだ人間、生きている人間に関わらず。彼らは今、何をしているのだろう。そう思つた鈴木はパートナーへと語りかけた。

「みんなは元気だろうか」

「……うん、きつとみんな元気だよ」

リニアはそつと答える。おそらく彼の言う『みんな』という中には本当に多くの意味が含まれているのだろう。そう思つたりニアはそれ以上、何も言う事はなかつた。

辛い過去も苦い過去も、全てがワルツの中に溶けていく。

そして彼らが回転する度にそれらは混ざり合い、いつしか笑顔へと変わっていく。

彼らは笑いながら踊つていた。

音楽もない中、踊つてゐる事がおかしいのか、あるいはこんな庭先で踊つてゐる事がおかしいのか、あるいは一目の前の人人が笑つてゐるからなのか。

「あの子たちは……一体何してゐるんだか」

天城は頭を抱えて、隣の少女へと問いかけた。

「……」

奏は何も言わずにじつと影から二人のワルツを眺めていた。

「ずっとああやつて踊っている」

「……そう」

そつと天城は先ほど見た夢を思い出していた。そして、懐かしそうな表情で二人のワルツを眺める。

「うん……悪くはないわね」

「うん」

いつのまにか天城はリニアの楽しそうな姿に夢の中の彼女を重ねていた。

「サラ、確かに前のドレスは返したよ」

そう呟いて、天城は穏やかな笑みを浮かべた。

「あ、先生!!」

踊り終えたりニアが天城の元へと駆け寄る。そして彼女はドレスの両端を掴んで軽く頭を下

げた。

「どうでしたか？」

「えあ」

「母より上手でしたか？」

「……それは答える事ができない」

サラ一の踊りは最悪だったからな。天城は心の中でそう笑い飛ばした。

月日は流れる。想い出は彼女の記憶とともに過ぎ去っていく。

それでもそれらは物の中に残す事が出来るのだ。

想い出の中で彼らは息をする。想い出の中で人は生き続けるのだ。

「I Know It's Over」End. ·

276psd